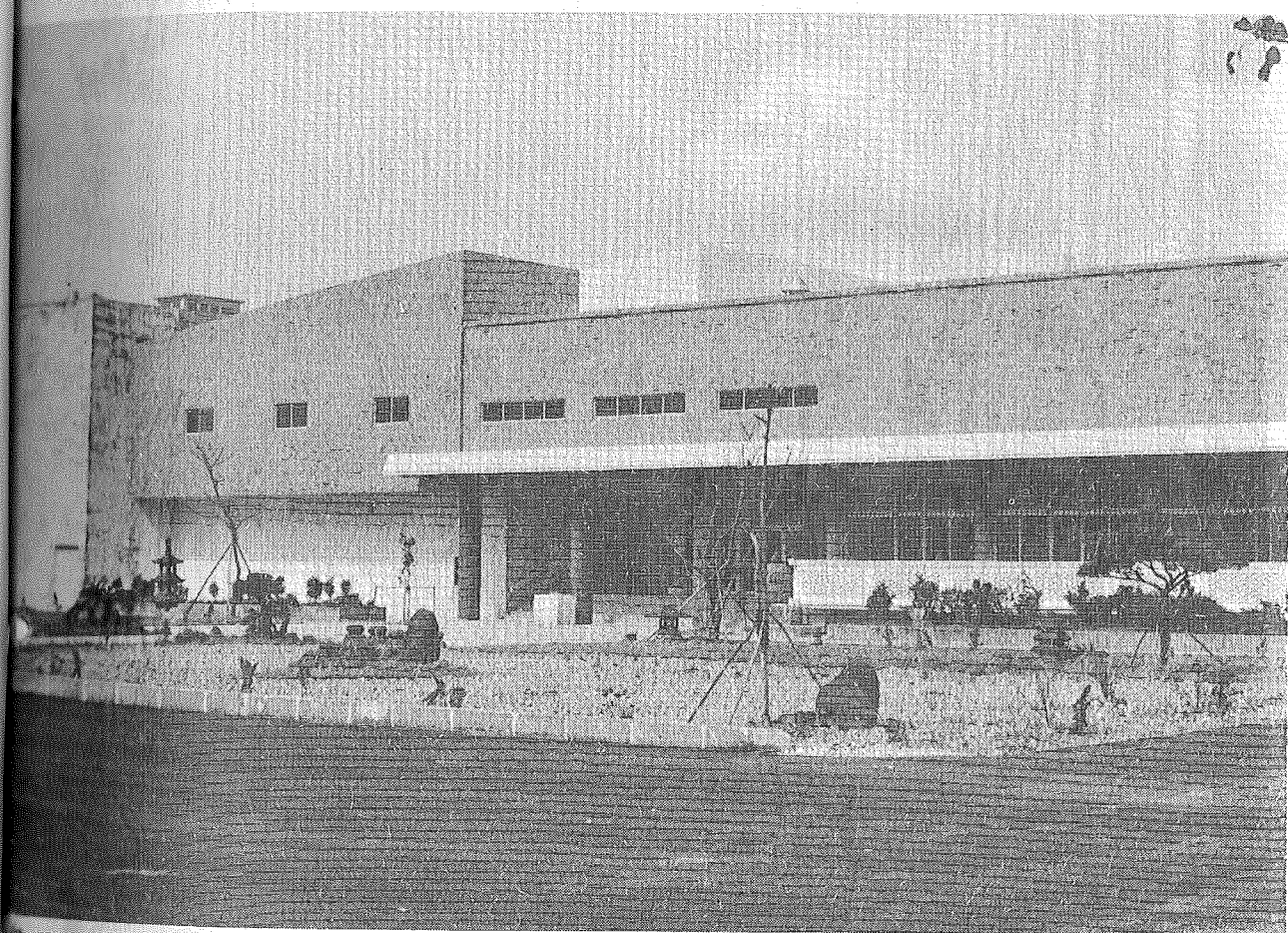


沖縄県立博物館

館 報



1974

NO. 7

沖縄県立博物館

目 次

序	館長 外間 正幸	1
沿 革		2
館内案内図		3
機構及び職員構成		6
予算の推移		7
所蔵資料現在高		7
資料購入点数の推移		8
当館所蔵の指定文化財		8
施設使用状況		9
入 館 者 数		11
来館学校団体名		12
新収蔵資料		15
新収蔵図書		17
主なる新収蔵写真		22
博物館主催行事		25
職員の活動状況		28
二階増築ニュース		30

研究及び調査報告

古謡にみる生活の思想と信仰	渡名喜 明	37
---------------	-------------	----

(資料紹介)

具志川市具志川城跡表採の考古資料について	新田 重 清	48
----------------------	--------------	----

序

今年は当館の二階増築工事の入札が、年の初めに二回も不調に終り、二月にようやく小波津組と随意契約が結ばれ、着工された。だが、着工後も資材の高騰や入手難などで、工事が難行し、当初の予定よりもだいぶ遅れて、十一月下旬にやっと完了した。その間、増築に関するいろいろな煩雑な仕事が、終始館にもつきまとい、そのために時間を相当さかねばならなかった。それでも小波津組の努力により、このような情勢下において、無事に増築できたことを幸せに思い、かつ、感謝している。

一方、館の館外活動においては、資料の収集や調査研究、その他本土での研修や講習会の参加等に、少ない職員で精一杯活動した。また、館内での特別展も活発に行ない、特に円覚寺展は別記のごとく、内外の観客に感銘を与えた。

今後も内容の充実に努めながら、これらの館活動をつづけていきたい。そして、新年度は特に二階に民俗や考古資料を豊富に展示し、また、美術工芸の陳列品も増やしたい。

それで、当館では二階増築を機会に、博物館の将来の基本構想をたて、これらの問題を解決しつつ、館の運営を全うしたい。そしてまた、社会教育の場としての役目も果たし、県民に親しまれる生きた博物館にしていきたい。今年も多くの方々から資料の寄贈や寄託を受け、博物館資料の充実にご協力いただき感謝している。

ここに48年度の館報を発刊して館の一カ年の活動をお知らせし、今後の相変らぬ御協力をお願いする次第である。

昭和 48 年 12 月 30 日

沖縄県立博物館長

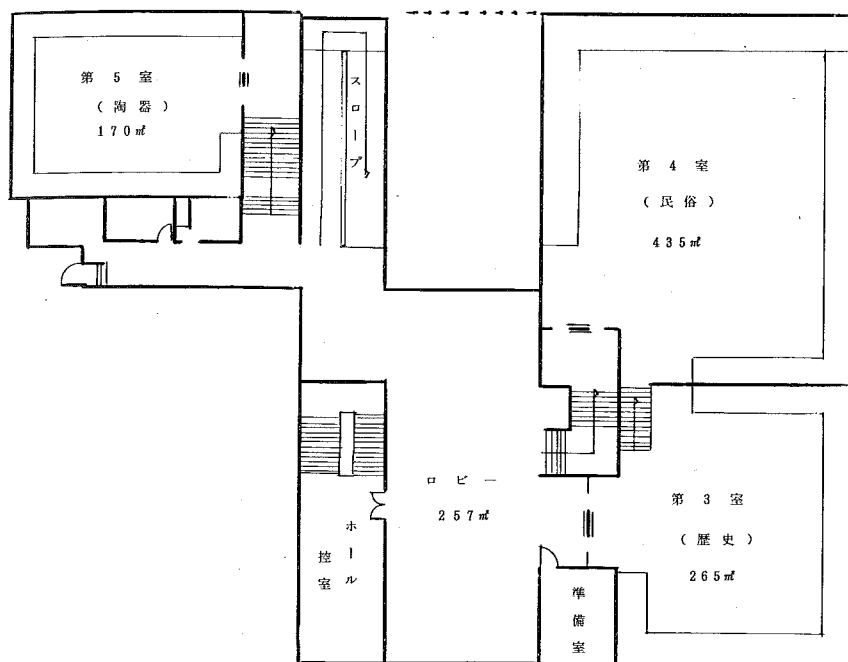
外 間 正 幸

沿革

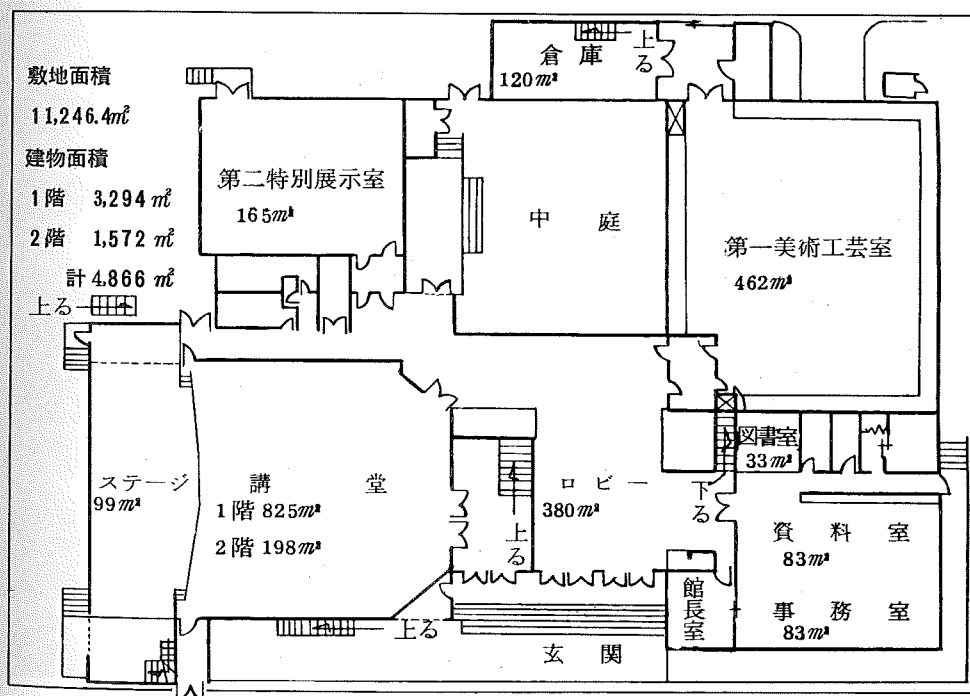
(1973年 1月～1973年12月)

- 2月 1日 二階増築工事，小波津組と随意契約成立。
- 2月 2日 二階増築工事始まる。
- 4月 11日 第二陳列室にて「紅型風呂敷と南蛮壺展」開催。5月27日まで。
- 5月 7日 東京国立博物館主催の特別展観「鎗金と沈金」に沈金器5点貸出す。6月28日返納される。
- 5月 9日 「田名家文書」，田名弘氏から寄託される。(期間 昭和53年5月8日まで。)
- 5月 16日 琉球新報社主催の「戦前の沖縄記録映画祭」に「琉球の風俗」「琉球の民芸」フィルム2巻貸出す。7月8日返納される。
- 6月 6日 当館所蔵の「おもろさうし」「混効験集」，受託中の「田名家文書」国の重要文化財に指定される。
- 7月 16日 琉球切手原画，沖縄郵政管理事務所より譲渡される。
- 7月 18日 文化庁が調査のため借用した「おもろさうし」，「混効験集」返納される。
- 9月 3日 当間恵喜氏等によって「中山世譜」の補修始まる。(文化課予算による)。10月16日まで。
- 9月 20日 第二陳列室にて「戦前の沖縄写真展」開催，10月23日まで。
- 9月 28日 日中貿易促進協，中国代表团一行来館。
- 11月 13日 第二陳列室にて「失われた国宝・円覚寺」展開催，翌年の1月20日まで。
- 11月 28日 二階増築工事完了。
- 11月 29日 高松宮殿下ご夫妻来館。
- 12月 17日 琉球新報社から映画フィルム「沖縄」，「海の民・沖縄島物語」，「南の島・琉球」計3巻寄贈される。
- 12月 19日 多和田真淳氏所蔵の考古資料一括して寄託される。(期間 昭和78年12月18日まで。)

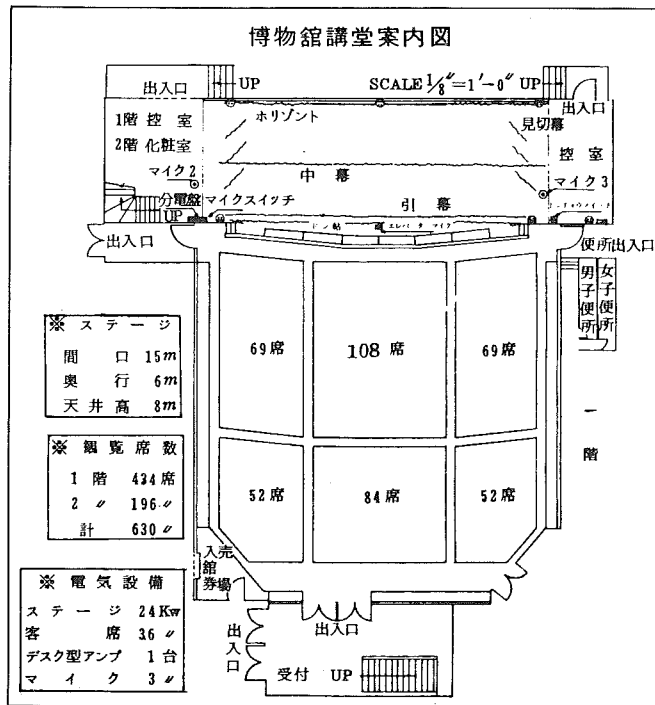
館内案内図



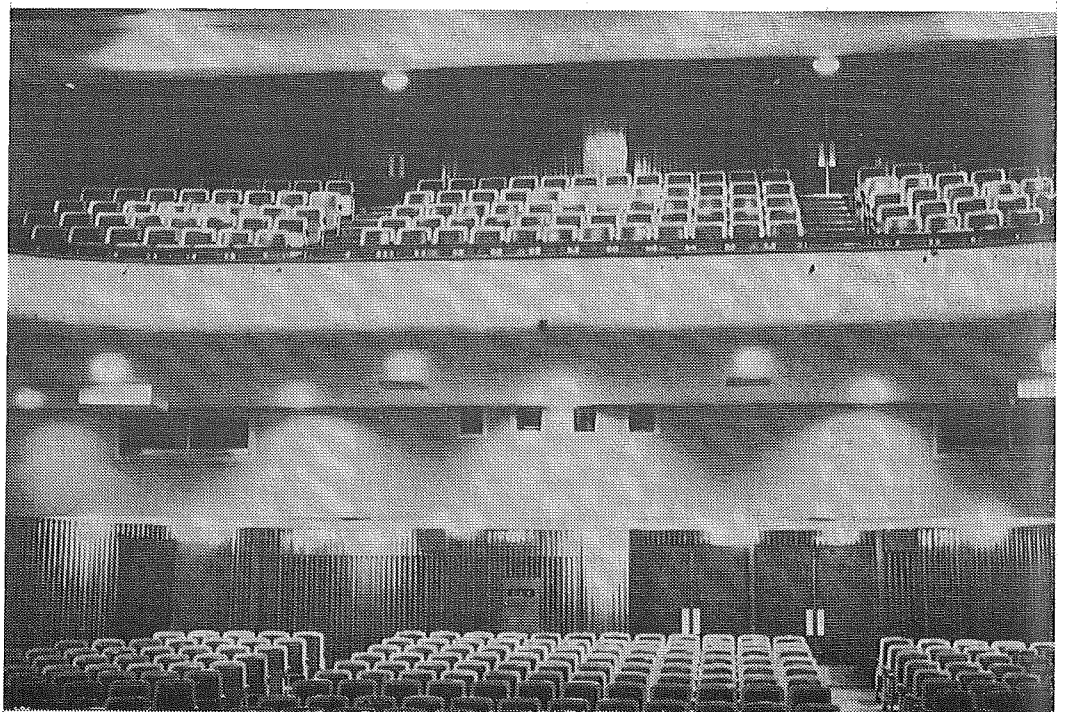
2階平面図



1階平面図



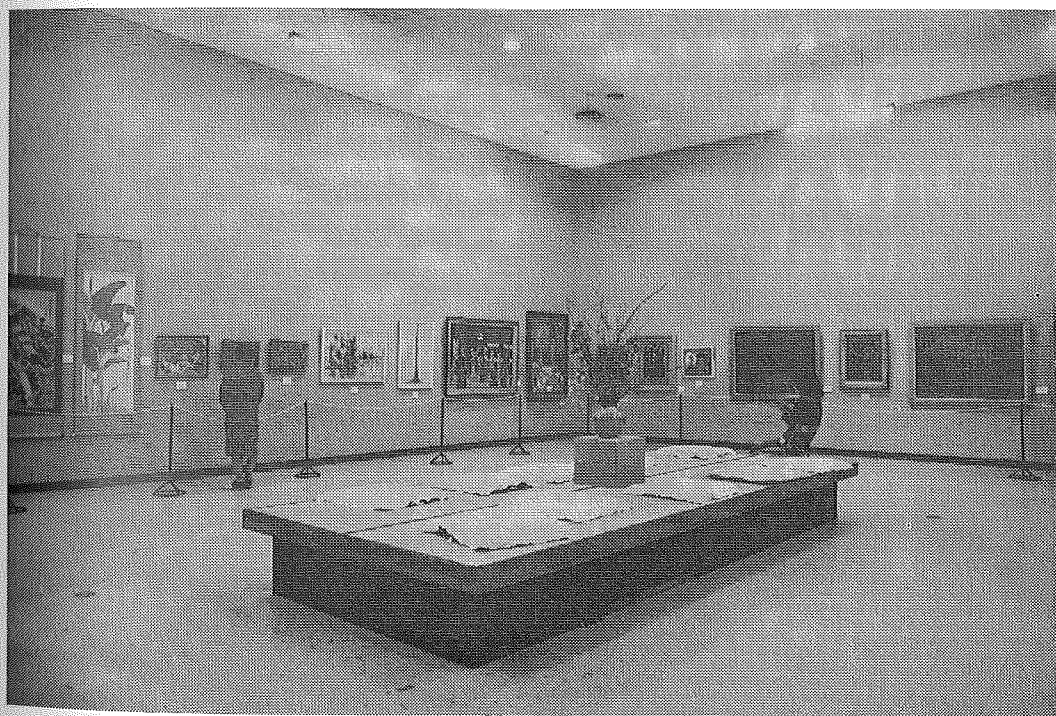
講堂平面図



講堂



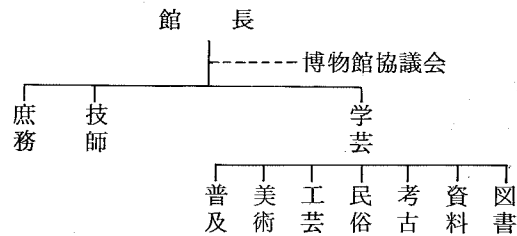
第1室（美術工藝）



第2室（特別展示室）

機 構 及 び 職 員 構 成

1. 機 構



2. 職員構成 (昭和48年12月31日現在)

職 名	人数	氏 名	備 考	氏 名	備 考
館 長	1	外 間 正 幸			
学 芸 員	4	新 田 重 清	考 古	上江洲 均	民 俗
		宮 城 篤 正	美術・工芸	渡名喜 明	美術・工芸
庶務係長	1	新 崎 善 清			
主 事	4	座喜味 よ し		津波古 久 子	
		仲 松 正 子		武 富 千賀子	
技 師	1	黒 島 惇			
用 務 員	1	与 儀 ウ シ			

3. 職員の異動

転 入 座喜味 よ し (昭和48年11月1日付教育庁総務課より)

転 出 崎 山 孝 子 (" " " 県立ろう学校へ)

4. 博物館協議会委員 (昭和47年10月30日発令)

学識経験者	会 長	宮 里 栄 輝	沖縄県史審議会委員
	副会長	山 里 銀 造	県文化財保護審議会委員
		安谷屋 正 量	県文化財保護審議会委員
学校教育関係者		仲宗根 繁	教育庁教育次長
		高 良 鉄 夫	琉球大学教授
		新屋敷 幸 繁	沖縄大学教授
社会教育関係者		金 城 正 光	教育庁社会教育課長
		照 屋 寛 祐	" 文化課長
		平 敷 静 男	沖縄県教職員組合中央執行委員長

予 算 の 推 移

年 度	定 員	予 算 額	内 訳		
			運 営 費	資料購入費	事 業 費
1968年度	11	62,463 ドル	29,473	1,500	31,490
1969 "	11	45,419 ドル	39,299	1,500	4,620
1970 "	11	67,961 ドル	41,761	1,200	25,000
1971 "	11	49,834 ドル	42,431	1,193	6,210
1972 "	11	48,843 ドル	45,723	810	2,310
昭和48 "	12	19,362 千円	10,453	6,640	2,269

所 蔵 資 料 現 在 高

(図書資料を除く)

1973年12月31日現在

分 類		収蔵別	購 入	寄 贈	合 計
A	絵	画	60	30	90
B	書	跡	70	113	183
C	彫	刻	10	183	193
D	建	築	0	5	5
E	陶	磁 器	428	1,233	1,661
F	染	織	739	143	882
G	漆	器	154	125	279
H	金	工	8	67	75
I	歴	史	0	7	7
J	貨	幣	1	71	72
K	楽	器	4	15	19
L	装	身 器	65	57	122
M	民	俗	171	466	637
N	考	古	0	80	80
O	そ	の 他	2	11	13
X	自	然	0	35	35
合 計			1,712	2,641	4,353

資料購入点数の推移

(図書資料を除く)

1973年12月31日現在

分類	年度	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	計
A 絵画		5	1		1								7
B 書跡		1	16								1		18
C 彫刻													
D 建築													
E 陶磁器			1	3		2	24	14		15	2		61
F 染織			5			2						26	33
G 漆器			11	6	3	10	3	2	3	2			40
H 金工				1		1							2
① 歴史													
② 貨幣													
K 楽器				1		1							2
㊦ 装身具				1	1						1		3
M 民俗				1	1		1	19		46	4	9	81
N 考古													
O その他								1					1
X 自然													
合計		6	34	13	6	16	28	36	3	63	8	35	248

当館所蔵の指定文化財

1. 国指定文化財(重文)

種別	名称	員数	指定年月日	所有者	備考
古文書・典籍	おもろさうし	22冊	昭48.6.6	沖縄県	22巻
" "	混効験集	2冊	"	"	縦25.5cm 横20cm 枚数227枚
" "	田名家文書	1帖	"	田名弘	32枚。寄託

2. 県指定文化財

種別	名称	員数	指定年月日	備考
彫刻	玉陵石彫獅子	1対	昭31.12.14	2基各高さ1.17m 胴廻り1.21m
"	木彫円覚寺白象並びに趣意書	1軀1枚	昭33.3.14	全長120cm 頭高61.2cm 胴廻り93.9cm
"	世持橋勾欄羽目	1括	"	高さ33.3cm 横80.6cm
工芸	志多伯閉鐘	1挺	昭30.5.23	全長77.2cm 糸蔵3.5cm 重量440g
"	黒塗螺鈿遊雁絵大文庫	1合	昭31.12.14	高さ16cm 縦41cm 横31cm 重さ2.29kg
"	黒塗堆錦山水絵大文庫	1合	"	高さ14cm 縦40.8cm 横31.7cm 重さ3.45kg
"	黒塗螺鈿雲文内金箔蓋付椀	1口	"	高さ11.8cm 重さ160g 直径12cm
"	旧首里城正殿前梵鐘	1口	昭33.3.14	高さ154.5cm 口径94cm 重さ600kg
"	開得大君御殿雲竜黄金簪	1本	"	全面黄金張重量21kg 全長28.4cm 直径11cm
"	三味線「江戸与那」	1挺	昭33.8.15	全長80cm 心長21.6cm 糸蔵4.8cm 重量503g
古文書・典籍	宮古島下地の首里大屋子への辞令	1幅	昭31.12.14	縦28.5cm 横82.5cm
"	評定所格護定本「中山世鑑」	6冊	"	6巻
"	"「中山世譜」	19冊	"	19巻

施設使用状況

1973年1月～12月

1. 講 堂

月 日	使用目的	使用者名	人 員
1. 5	演奏会	フォーク同好会	200
23～25	文化祭	県立真和志高校	1,600
2. 16～18	NHKのど自慢公開録画	NHK	630
3. 3	臨時総会	沖縄考古学会	100
11	第19回中央青年祭	沖縄青年団協議会	630
23	修了式	城西幼稚園	550
4. 28	総 会	琉球びんがた伝統技術保存会	30
5. 15	紅型に関する映画見学	琉球びんがた伝統技術保存会	150
6. 2	総 会	城西小学校 P.T.A	250
28	総 会	県高校英語教育研究会	150
7. 25	講演会	県高校教育工学研究会	400
8. 18～19	舞踊けいこ	金城美枝子琉舞道場	20
21～24	"	宮里敏子琉舞研究所	70
28～30			
26. 31.	"	宮城美能留琉舞研究所	15
9. 2	三味線けいこ	野村流古典音楽協会那覇支部	80
9. 5～6	琴けいこ	棚原靖子箏曲研究所	30
7	"	高良時江クラブ	10
19. 23			
26. 30	組踊けいこ	伝統組踊保存会	120
3. 7	"	"	160
10. 14			
21. 24			
28. 31			
11. 3.	映写会	県教育庁文化課	200
8. 11			
15. 18	組踊けいこ	伝統組踊保存会	100
22.			
12. 6. 9	"	"	140
13. 16			
20. 23			
27.			
7～9	琉 大 祭	琉 球 大 学	600

2. 第2陳列室

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名
12.14～2.25	新収蔵品紹介展	当 博 物 館
3.1～3.14	屋宜盛功滞欧米作品展	屋 宜 盛 功
3.17～4.1	小橋川源慶壺屋本窯展	小 橋 川 源 慶
4.11～5.27	当館所蔵びんがた風呂敷と南蛮甕展	当 博 物 館
9.21～10.21	戦前の沖縄写真展	” ”
10.25～11.4	無形文化財県指定記念紅型作品展	伝 統 紅 型 保 存 会
11.13～	失われた「国宝円覚寺」展	当 博 物 館

※ 6月1日から9月20日まで、2階増築工事のため閉室。

3. ロビー

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名
12.14～6.30	新収蔵品紹介展	当 博 物 館
3.1～	楽器展示（常陳）	” ”

入 館 者 数

1. 参観者統計

年 別	人 数	備 考
1962 年	119,437	
1963 年	119,281	
1964 年	150,935	
1965 年	89,593	
1966 年	135,386	11月新館開館
1967 年	229,464	「日本古美術展」開催
1968 年	97,062	
1969 年	100,110	
1970 年	100,238	
1971 年	268,524	「日本古美術展」開催
1972 年	308,583	「50年前の沖縄写真展」「日本古美術展」開催
1973 年	96,317	
計	1,814,930	

2. 月別参観者

(1973年1月～12月)

項目 月	大 人	学 生	生 徒	計	開館日数	1日平均	備 考
1	4,968	159	874	6,001	23	261	
2	6,773	318	242	7,333	23	319	
3	6,975	1,145	2,197	10,317	26	397	
4	5,518	272	463	6,253	23	272	
5	5,495	136	2,499	8,130	25	325	
6	4,339	100	2,101	6,540	25	262	
7	4,680	607	1,247	6,534	26	251	
8	7,099	1,389	1,652	10,140	27	376	
9	2,923	289	492	3,704	24	154	
10	6,033	472	3,312	9,817	25	393	
11	9,070	226	6,850	16,146	25	646	
12	2,865	284	2,253	5,402	23	235	
計	66,738	5,397	24,182	96,317	295	327	

来 館 学 校 団 体 名

(1973年1月~12月)

月	学 校 団 体 名	人 数	月	学 校 団 体 名	人 数
1 月	与那原町 与那原中学校	205	5 月	鹿児島県 阿室中学校	57
"	那 覇 市 首里中学校	36	"	久 米 島 久米島中学校	80
"	名 護 市 北部農林高等学校	70	"	南大東村 南大東中学校	34
"	" 羽地小学校	64	"	久 米 島 具志川中学校	100
"	那 覇 市 沖縄実務学園	29	"	KADENA MIDDLE SCHOOL	48
"	" Tyler Elementary School	88	"	久 米 島 久米島比屋定中学校	50
2 月	宜野湾市 meroy Elem school	24	"	大宜味村 喜如嘉中学校	42
"	那 覇 市 那覇米人中学校	23	"	南大東村 南大東中学校	36
"	大 阪 府 近畿大学商経学部	21	"	鹿児島県 与論那間小学校	49
3 月	Kadena middle school	110	"	宜野湾市 Meroy Elem School	173
"	那 覇 市 那覇市神原幼稚園	238	"	国 頭 村 国頭中学校	121
"	九州電機学園高校	40	"	座間味村 阿嘉中学校	46
"	大 里 村 大里南小学校	120	"	城 辺 町 西城中学校	103
"	那 覇 市 Tyler Elementary School	20	"	那 覇 市 マチナト米人小学校	65
"	" 若狭小学校	280	"	久 米 島 仲里中学校	135
"	東 京 都 武蔵野高等学校	727	"	宮 崎 県 都城東高校	130
"	Mercy Elem school	60	6 月	伊良部村 伊良部中学校	149
"	勝 連 村 津堅小学校	37	"	大宜味村 大宜味中学校	24
"	東 京 都 早稲田実業高校研修団	40	"	下 地 町 下地中学校	90
"	愛 知 県 名古屋海洋旅行少年団	72	"	栗 国 村 栗国中学校	49
"	宮 崎 県 日南農林高校	44	"	名 護 市 羽地中学校	204
"	与那城村 与勝教会学校	26	"	上 野 村 上野中学校	121
"	那 覇 市 救世教学生会	31	"	平 良 市 西辺中学校	81
"	広 島 県 尾道高校	108	"	平 良 市 平良中学校	400
"	那 覇 市 救世教学生会	48	"	伊平屋村 伊平屋中学校	74
4 月	" OKNAWA G.S	31	"	福 岡 県 田川農林高校	33
"	神奈川県 向上高校	82	"	渡名喜村 渡名喜中学校	50
"	那 覇 市 Tyler Elementary school	68	"	鹿児島県 与論小学校	62
"	KADENA MIDDLE SCHOOL	34	"	八 重 山 石垣中学校	262
5 月	浦 添 市 神森中学校	240	"	福 岡 県 九州産大附属九州産業高校	347
"	" 神森小学校	282	"	座間味村 慶留間中学校	15
"	那 覇 市 那覇米人中学校	30	7 月	八 重 山 石垣第二中学校	357
"	" Tyler Elementary	43	"	宮 崎 県 日南高等学校	46
"	南風原村 宮城 P T A 会と児童	50	"	渡嘉敷村 渡嘉敷中学校	59

1)

数

57
80
34
00
48
50
42
36
49
73
21
46
03
65
35
30
49
24
90
49
04
21
81
100
74
33
50
62
262
347
15
357
46
59

7月	伊良部村	佐良浜中学校	195
"	伊是名村	伊是名中学校	115
"	長野県	松商学園短期大学	63
"	福岡県	福岡女子短期大学	20
"	愛媛県	松山城南高校	88
"	鹿児島県	鹿児島警察学校	53
"	愛媛県	帝京第五高校	158
"	宮崎県	宮崎女子短期大学	21
"	勝連村	南原小学校	39
"		ロータリーインターアクト	20
"	糸満市	兼城中学校	125
"	伊江村	伊江中学校	200
10月	宮崎県	宮崎県立小林商業高等学校	40
"	八重山	八重山伊原間中学校	71
"	宮崎県	宮崎中央高校	53
"	山口県	徳山桜ヶ丘高校	133
"	神奈川県	神奈川県青年の船	199
"	名護市	瀬喜田小学校	22
"	"	瀬喜田中学校	34
"	北海道	北海道社会保険高等看護学院	36
"	静岡県	東海大学第1高等学校	46
"	玉城村	玉城中学校	240
"	本部町	浜元中学校	38
"	金武村	金武小学校	139
"	恩納村	仲泊中学校	37
"	知念村	知念中学校	150
"	具志川市	具志川中学校	76
"	玉城村	玉城小学校	107
"	読谷村	読谷小学校	125
"	コザ市	中の町小学校	16
"	本部町	伊野波中学校	46
"	鹿児島県	下平川小学校	35
"	那覇市	沖縄工業高等学校	77
"	嘉手納村	嘉手納中学校	320
"	大分県	碩南高校野津原町分校	42
"	鹿児島県	沖永良部上城小学校	13
"	大分県	佐伯鶴城高校	43
"	横浜市	東京クラフトデザイン研究所	20

10月	山口県	山口県立水産高等学校	39
"	大里村	大里南小学校	118
"	本部町	瀬底中学校	50
"	名護市	久辺中学校	62
"	大分県	大分商業高校	364
"	大宜味村	塩屋中学校	52
"	名護市	源河小学校	47
"	東村	有銘中学校	24
"	西原村	坂田小学校	62
"	本部町	新里小学校	50
"	名護市	真喜屋小学校	43
"	国頭村	辺土名小学校	83
48.11	宜野座村	漢那小学校	20
"	美里村	北美小学校	129
"	東京都	女子美術大学	22
"	玉城村	百名小学校	54
"	宜野湾市	普天間第二小学校	168
"	名護市	稲田小学校	47
"	名護市	天仁屋小学校	15
"	与那城村	与勝第二中学校	110
"	本部町	崎本部中学校	38
"	国頭村	北国中学校	37
"	コザ市	コザ中学校	408
"	与那城村	与勝中学校	20
"	勝連村	勝連小学校	99
"	名護市	東江小学校	120
"	石川市	城前小学校	107
"	名護市	久辺小学校	78
"	国頭村	奥間小学校	47
"	石川市	宮森小学校	108
"	糸満市	高嶺中学校	202
"	名護市	屋部中学校	105
"	与那城村	平安座中学校	46
"	今帰仁村	湧川小学校	43
"	宮崎県	小林西高校	190
"	石川市	城前小学校	108
"	恩納村	恩納中学校	122
"		西南学院大学	25

48.11	今帰仁村	天底小学校	70	48.11	コザ市	島袋小学校	110
"	兵庫 県	兵庫県八代学院高校	363	"	恩納 村	恩納小学校	124
"	東風平村	東風平小学校	240	48.12	石川 市	伊波小学校	198
"	コザ 市	コザ小学校	183	"	国頭 村	佐手中学校	40
"	名護 市	大宮小学校	122	"	糸満 市	米須小学校	51
"		Machinato Elm School	17	"	名護 市	屋部小学校	39
"	大宜味村	大宜味中学校	26	"	与那城村	与那城小学校	200
"	名護 市	羽地小学校	74	"	美里 村	美里小学校	90
"	糸満 市	兼城小学校	126	"	石川 市	石川中学校	320
"	東 村	東中学校	42	"	今帰仁村	兼次中学校	64
"	中城 村	津覇小学校	105	"	大宜味村	津波中学校	23
"	玉城 村	船越小学校	55	"	読谷 村	渡ヶ次小学校	127
"	宮崎 県	有徳高校	71	"	名古屋市	常盤女学院	79
"	名護 市	屋我地小学校	50	"	読谷 村	喜名小学校	80
"	コザ 市	安慶田小学校	297	"	"	古堅中学校	170
"	名護 市	名護中学校	478	"	本部 町	本部中学校	208
"	宜野湾市	普天間小学校	223	"	那覇 市	城岳小学校	26
"	具志川市	高江洲中学校	140	"	勝連 村	津堅小学校	55
"	本部 町	上本部中学校	109	"	今帰仁村	今帰仁中学校	195
"	糸満 市	真壁小学校	125	"	国頭 村	国頭中学校	120
"	糸満 市	南小学校	143				

新 収 蔵 資 料

(1973年1月~12月)

1. 購入の部

分類	名 称	数量	分類	名 称	数量
陶磁器	荒焼水甕	1	民 俗	フクター (つぎはぎ)	1
染 織	久米島紬羽織	1	"	芭蕉着物	1
"	紺地経縞木綿着物	1	"	荒芭蕉着物	1
200	久米島紬紵短羽織	1	"	" "	1
90	絹紺地型附絣着物	1	"	絹経縞着物	1
320	紺地木綿絣着物	1	"	芭蕉着物	1
64	花織木綿着物	1	"	木綿シチガーラ着物	1
民 俗	フクター	1	染 織	紺地番匠絣着物	1
23	木綿絣着物	1	"	紺地貫雲絣木綿着物	1
127	経縞綿着物	1	"	黒地銭玉絣木綿着物	1
79	博多織絹地着物	1	"	絹浅地経縞着物	1
80	木綿トーガシー着物	1	"	紺地経縞着物	1
170	黒地格子木綿着物	1	"	紺地変化織着物	1
208	紺地経縞男物着物	1	"	紺地格子柄木綿着物	1
26	紺地経縞芭蕉布着物	1	"	紺地経縞絹着物	1
55	紺地経縞木綿着物	1	"	経縞芭蕉布着物	4
195	格子柄芭蕉布着物	1	"	黒地銀行敷瓦絣木綿着物	1
120	民 俗 サバニ (本ハギ)	1			

2. 寄贈の部

分類	名 称	数 量	寄 贈 者 名 (敬称略)
染 織	琉球絣着物 (絹)	1	那 覇 市 与 座 マヅル
染 織	琉球絣着物 (木綿)	1	" "
染 織	格子に絣着物	1	" "
陶磁器	ムルンガーマミ (酒甕)	4	糸 満 市 玉 城 清 義
"	塩酸ガーマミ	1	" "
民 俗	麴 箱	1	" "
"	クシチ (甌)	1	" "
"	酒 樽	2	" "
"	ウーキ (水桶)	2	" "
"	ハカイ (秤)	1	" "
"	枰 (一升枰)	1	" "
"	ナカムイ (一合枰)	1	" "
"	ジョウゴ	2	" "
"	定 規	1	" "
"	酒 樽	1	" "

民 俗	ブ イ	1	糸 満 市	玉 城 清 義
"	醬油汲み	1	"	"
"	ニーブ	3	"	"
"	柄 鍋	1	"	"
"	ユナバーキー	1	"	"
"	ヘ ラ	1	"	"
"	酢酸びん	1	"	"
"	鍋の蓋	1	"	"
"	フクターウール	2	"	"
"	ニクブク	2	"	"
"	上焼御殿型厨子甕	3	浦 添 市	宮 城 良 直
"	素焼御殿型厨子甕	2	"	"
"	壺型厨子甕	5	"	"
陶磁器	上焼ミジクブサー	1	那 覇 市	宜 保 栄 治 郎
貨 弊	文久永宝(銅銭)	1	浦 添 市	宮 城 篤 三
民 俗	素焼御殿型厨子甕	2	那 覇 市	山 城 勝
"	上焼御殿型厨子甕	2	"	"
陶磁器	飴釉香炉	1	那 覇 市	大 嶺 実 清
"	南蛮甕(南支系)	1	糸 満 市	比 嘉 長 盛
民 俗	壺型厨子甕	1	那 覇 市	知 念 嘉 栄
"	壺型厨子甕㊦	1	"	"
"	マ グ	3	那 覇 市	与那覇 清 友
"	ブーイリ マグ	1	"	"
"	ピラフ	2	"	"
"	ナビンフタ	1	"	"
"	アンディラ	1	"	"
"	サ シ	1	"	"
染 織	芭蕉布経縞着物	1	知 念 村	外 間 カ メ
陶磁器	無地アラマカイ	1	那 覇 市	石 川 清 源
"	コバルト染付瓶子	1	"	"
民 俗	石厨子	4	"	"
"	石厨子の蓋	2	"	"
"	壺型厨子甕	1	"	"
陶磁器	ナナゴータワカサー(荒焼徳利)	1	那 覇 市	島 袋 秀 栄
民 俗	綱のおもり(陶製)	2	"	"
楽 器	胡 弓	2	東 京 都	鍋 島 直 紹
染 織	木綿紺地紺紬着物	1	美 里 村	喜屋武 盛 亀
"	桐板白地紺経縞着物(男物)	1	"	"
民 俗	バシャフラ	1	宮 古 郡	石 原 金 一郎
"	豆腐箱	1	"	砂 川 玄 吉
"	マーグ	1	"	仲 間 キ ク
"	スルンヌ	1	那 覇 市	平 良 専 明

民俗	下駄	1	那覇市	与那覇	清友
陶磁器	灰釉マカイ	1	"	島	武己
民俗	タンシ (箆笥)	1	南風原村	新垣	ウシ
"	クルマイリ	1	糸満市	大城	松助
"	ケー	1	佐敷村	普天間	敏子
"	壺型厨子甕	11	那覇市	上原	豊子
"	上焼御殿型厨子甕	4	浦添市	宮城	良直
"	素焼御殿型厨子甕	1	"	"	"
"	石製厨子	1	那覇市	山城	勝
染織	経縞芭蕉布男物着物	1	今帰仁村	運天	ゴゼイ
"	女物中国服	1	那覇市首里	高原	春子
"	黒地緋木綿着物	1	"	"	"
"	紺地綾中麻着物	1	読谷村	大城	恵子
"	芭蕉布つぎはぎ子供着物	1	"	"	"
"	経縞芭蕉布子供着物	1	"	"	"

新 収 蔵 図 書

購入の部

書名	部数	書名	部数
人事関係法令集	1	琉球植物誌	1
琉球王家伝来衣裳	1	例解文章ハンドブック	1
教育関係職員必携	1	原色陶器大辞典	1

寄贈の部

書名	部数	寄贈者名	書名	部数	寄贈者名
おもろそうし	1	岩波書店	鹿児島民俗 No. 55 ~ 59	5	鹿児島民俗同好会
研究紀要 第1~2	2	興南高校文化研究同好会	自然科学と博物館 No. 39	1	国立科学博物館
博物館年報 No. 5	1	国立科学博物館	明治村通信 No. 31 ~ 41	10	博物館明治村
館報 No. 12, 14.	2	佐賀県立博物館	内田洋行総合カタログ	1	内田洋行
国・県指定文化財一覧及び " " " " 件数一覧	1	沖縄県教育委員会	日本の美術 No. 81 ~ 90	10	至文堂
民俗文化 No. 111 ~ 121	10	滋賀民俗学会	青い海 3号, 7号 春季号, 秋季号	4	青い海出版社
既刊 調査報告書	1	"	博物館だより No. 8 ~ 9	2	市立旭川郷土博物館

鹿児島県有形民俗 資料目録	1	鹿児島県明治百年 記念建設調査室	なりた (No. 4~7)	4	成田山史料館
調査室だより	2	"	先史 (No. 7. 8)	2	駒沢大学考古学 研究室
長崎有形民俗資料調査報告	1	"	創立100年記念東京国立博 物館所蔵名品展目録	1	東京国立博物館
トカラ列島有形民俗資料 調査報告書	1	"	世界の染織	1	大阪市立美術館
鹿児島県の正月行事	1	"	国宝阿須賀神社伝来古神宝	1	京都国立博物館
奄美諸島種子島, 屋久島, 民俗資料調査報告書	1	"	基地沖縄	1	琉球新報社
霧島山麓民俗資料調査 報告書	1	"	沖縄現代史	1	"
小浜島舞踊曲工工四第一巻	1	黒 島 惇	黎明期の海外交通史	1	"
館 報 (No. 219 ~ 222)	4	釧路市立郷土 博物館	沖縄の世論	1	"
市立旭川郷土博物館月報 (No. 42 ~ 52)	11	市立旭川郷土 博物館	徳之島採集手帳 No. 21	1	徳之島郷土研究会
博物館 ニュース	1	埼玉県立博物館	今日の日本画	1	山種美術館
" (1月号~11)	11	日本博物館協会	MOUSEION (No. 18. 19)	2	立教大学
教育沖縄 (3, 4号・号外)	3	沖縄県教育委員会	史料館報 (No. 17. 18)	2	国立史料館
博物館だより (No. 33~36)	4	神奈川県立博物館	大宰府大宰府天満宮史料No. 8	1	大宰府天満宮 文化研究所
研究報告	3	国立科学博物館	MUSEUM (1~10月分)	10	東京国立博物館
日本の祭	1	大阪市立博物館	ROBERT・H・LOWIE・MUSEUM ・OF・ANTHROPOLOGY	1	大城精徳
高麗史 (上, 中, 下索引)	4	李 享 求	富岡5号古墳	1	群馬県立博物館
国立中央博物館名品図鑑	1	"	館 報 (No. 14. 15)	2	" "
琉球の陶器	2	琉球電信電話局	博物館報 (No. 13. 15. 19)	3	佐賀県立博物館
琉球・おとぎばなし	1	沖縄風土記社	沖縄の民具	1	上江洲 均
琉球音楽考	1	大城精徳	小濱島誌	1	山 城 浩
用と美 (No. 7. 8. 9)	3	用と美の会	郷土資料館だより (No. 13. ~ 15)	3	石川県立郷土 資料館
議会時報 (創 刊 号) 第2~4号	4	県議会事務局	山口県の博物館	1	山口県博物館協会
関東の鉄仏, 図録	1	埼玉県立博物館	民俗資料調査報告書	1	鹿児島県明治百年 記念館建設調査室
回想の清方, 図録	1	サントリー美術館	対島の在来馬 (対島馬)	1	日本中央競馬会
あるく, みる, きく (No. 72~ 90)	19	日本観光研究会	教育財政調査報告書 地方教育行政調査 「春の特別展」はたらく 風俗図録	1	沖縄県教育委員会
琉球の唐手物語	1	石川文一		1	サントリー美術館

料館
 考古学
 研究室
 博物館
 美術館
 博物館
 研究会
 宮
 虎所
 博物館
 博物館
 館
 館
 年
 室
 会
 会
 館

歴史と博物館 (11月号)	1	歴史研究会	沖縄教育年報	1	沖縄県教育委員会
沖縄県教育事情懇談会	1	沖縄県教育庁	護得久本遺老説傳	1	〃 県立図書館
北京周報 (73年1~3号)	3	北京周報社	県央部の民俗	1	神奈川県立博物館
人民中国 (72年11月号)	1	人民中国雑誌社	琉球から沖縄へ	1	月刊沖縄社
小樽市博物館所蔵の蝶について	1	小樽博物館	明治の沖縄	1	〃
学制100年記念展, 出品目録	1	〃	沖縄の伝説と民話	1	〃
第20回 全国博物館大会報告書	2	日本博物館協会	大宰府史跡	1	九州歴史資料館
第5回 学芸員研究集会報告書	1	〃	市勢要覧の謹呈	1	那覇市企画部
矢作城主国分家系譜	1	海野正造	錦帯橋に関する史料	1	宮田伊津美
武田家系と中川家系	1	〃	46年度京都国立博物館年報	1	京都国立博物館
歴史読本	1	〃	民俗研究	1	鹿児島民俗学会
佐原市火倉披露遺跡	1	〃	能装束の美	1	琵琶湖文化館
自治おきなわ (5,7,9,11月号)	4	沖縄県町村会	石田三成	1	〃
市立旭川郷土博物館 所蔵目録Ⅲ	1	市立旭川郷土博物館	東京国立博紀要 第8号	1	東京国立博物館
博物館だより (No.9, 10)	2	〃	「龍漂」教育センター所報	1	沖縄県立教育センター
研究報告 (No.9)	1	〃	博物館研究報告	1	横須賀市博物館
祈りと奇蹟	1	山蔭基央	サントリー美術館図録	4	サントリー美術館
一霊四魂	1	〃	維 報	1	横須賀市博物館
神道の現代的解義	1	〃	1967年採集の陸中産淡水魚類	1	友田淑郎
ヨガと神道	1	〃	壱岐・対馬の淡水魚類相についての予察的研究	1	友田淑郎
己貴秘伝	1	〃	沖縄の開発	1	沖縄開発庁
ふくおか文化 (No.22)	1	福岡県文化会館	花織花染 3号	1	首里高・織染料
美術館ご案内	1	〃	ボストン美術館東洋美術名品展	1	中川伊作
近江の佛教美術	1	滋賀県立琵琶湖文化館	只一人・長嶺亀助自伝	1	宮城健盛
琵琶湖文化館要覧	1	〃	原色陶器大辞典	1	中村ヨシ
47年度観覧者等実態調査	1	東京国立博物館	東京都の自然	1	東京都高尾自然科学博物館
琉球の文化 (3~4号)	2	大城精徳	若夏国体グラフ	1	沖縄県国体本部

観光要覧	1	沖縄県労働商工部	沖縄県工芸関係事業所名簿	1	沖縄県産業デザイン振興会
日本狼のゆくえ 図録	1	原野農芸博物館	アサヒグラフ	1	朝日新聞社
サボテンの驚異展	1	"	おきなわ —その歴史と文化—	1	沖縄県特別国体事務局
沖縄県史 3. 経済	1	沖縄史料編集所	琉大史学 第4号	1	琉大史学会
" 民俗 I	1	"	琉球における 仮名文字の研究	1	東恩納千鶴子
沖縄県郷土資料総合目録	1	沖縄図書館協会	若夏国体・事務局だより 最終号	1	沖縄県特別国体事務局
加曽利貝塚	1	加曽利貝塚友の会	白山麓 民俗資料緊急 調査報告書	1	石川県立郷土資料館
大阪市立博物館報	2	大阪市立博物館	佐賀県立博物館年報	1	佐賀県立博物館
大阪城天守閣所蔵資料目録	1	"	沖縄国際海洋博覧会の概要	1	沖縄県沖縄国際海洋博覧会協力局
" " " 続	1	"	東京国立博物館紀要 第8号	1	東京国立博物館
大阪築城関係史料	1	"	おきなわ教育の概観	1	沖縄県教育庁 総務課
大阪城南外濠々底遺構 発掘調査概報	1	"	郷土資料目録	1	那覇市企画部
大 阪 城	1	"	神奈川県文化財図鑑 (無形文化財民俗資料)	1	神奈川県教育 委員会
大 阪	1	"	神奈川県の民俗芸能	1	"
民俗資料緊急調査報告書	1	和歌山県 教育委員会	" " 別冊	1	"
石川県立郷土資料館	1	石川県立 郷土資料館	" " レコード	2	"
丹後の文化財 図録	1	大阪市立博物館	国立科学博物館研究報告	1	国立科学博物館
石川県立郷土資料館 事業概要	1	石川県立郷土 資料館	苦小牧地方産貝類展	1	苦小牧市青少年 センター
郷土資料館だより (12,13号)	2	"	研究紀要 第5冊	1	大阪市立博物館
白山自然保護センター概要	1	"	福島県文化センター月報 (No.19~23)	5	福島県文化 センター
石川県美術館要覧	1	石川県美術館	石橋美術館々報 No.17	1	石橋美術館
石川県博物館協議会々報 第1 第2	2	石川県博物館 協議会	館 報 3	1	武蔵野美大美術 資料図書館
演劇博物館案内	1	演劇博物館	自然と文化 (草木染)	1	観光資源保護財団
八聖殿郷土資料館	1	八聖殿郷土 資料館	香川家文書	1	宮田伊津美
当谷道人	1	滋賀県立琵琶湖 文化館	京都国立博物館だより 19号	1	京都国立博物館
沖縄産業デザイン振興ニュー ース (1~4号)	4	沖縄県産業デザ イン振興会	函館志海苔古銭	1	市立函館博物館
沖縄県産業デザイン 振興会について	1	"	SARANIP (No.7~8)	2	"

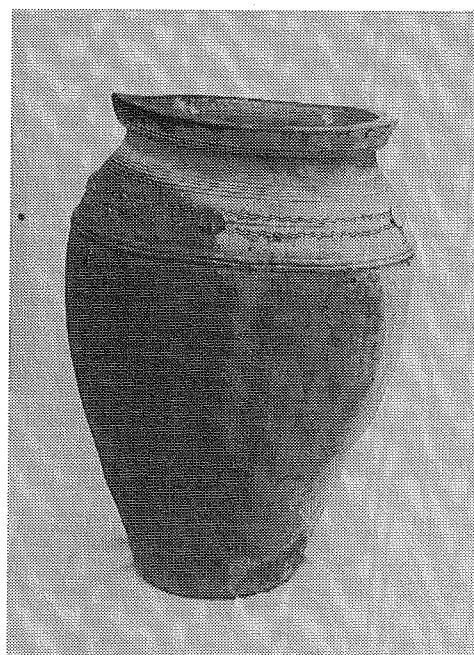
寺内萬治郎展図録	1	埼玉県立博物館	館 報 (5号)	1	久能山東照宮博物館
桑 の 邑	1	東京都稲城市教育委員会	公済時報	1	公立学校共済組合
稲城市文化財調査報告書	1	"	毛姓世系図	1	末吉安久
小松市立博物館研究紀要 第8集	1	小松市立博物館	交通科学館だより	1	交通科学館
日本史探訪 第8集	1	角川書店	研究紀要	1	宮崎県総合博物館
要 覧 48年度	1	沖縄県立教育センター	宮崎県総合博物館年報2.	1	"
沖 縄 第2回	1	早実(早稲田大学)	日向古美術展図録	1	"
新聞記事索引 第1集	1	琉大附属図書館	ハブ=反鼻蛇(恐るべき毒ヘビの全貌)	1	高良鉄夫
沖縄の文化と自然を守る要望書	2	沖縄県教育庁文化課	琉球の自然と月物	1	"
研究業績	1	熱川バナナ・ワニ園研究室	琉球の残酷物語	1	石川文一
学校一覽	2	沖縄県教育庁総務課	郷土館だより (No. 7. 8)	2	青森県立郷土館
沖縄県・国指定・県指定の文化財表示図	1	月刊沖縄社	博物館だより	1	山形県立博物館
南島研究	2	南島研究会	岡山民俗	1	岡山民俗学会
沖縄概観	1	沖縄県企画部	博物館だより (5. 6号)	2	岡山県立博物館
消費者ハンドブック	1	" "	小原流芸術参考館名品図録	1	外間正幸
沖縄県立図書館要覧	1	沖縄県立図書館	あかし……市勢のあらまし	1	"
研究報告	1	横須賀市博物館	緑の回廊	1	"
麦 僊	1	山種美術館	人類に奉任する今日と明日の博物館	1	国際博物館会議日本委員会
京都国立博物館要覧	1	京都国立博物館	兵庫の博物館	1	兵庫県博物館協会
蔡鐸本中山世譜	4	沖縄県教育委員会	第21回全国博物館大会資料	1	日本博物館協会
日本の文化地理 (No. 17)	1	講 談 社	伊丹市立博物館目録3号	1	伊丹市立博物館
南方同胞援護会17年のあゆみ	1	沖縄協会	文化財実態調査報告書	3	沖縄開発庁
横山操の回顧	1	山種美術館	文 化 財	1	文化庁文化財保護部
みんなの県政 (No. 5. 6)	2	沖縄県知事公室	丹 波 5号	1	丹波民俗研究会
原色 沖縄の魚	1	具志堅宗弘	博物館年報	1	市立市川博物館
神秘の琉球	1	高安六郎	ほりのうち	1	市立市川博物館
染織と生活 (No. 1~3)	3	染織と生活社	古墳時代の文化	1	滋賀県教育委員会

沖縄商工名鑑 (48年版)	1	沖縄興信所	研究会報 (No. 6)	1	徳之島郷土研究会
道立美術館だより (No.22)	1	北海道立美術館	帰化植物図譜	1	福岡県帰化植物研究会

主なる新収蔵写真



酒 樽



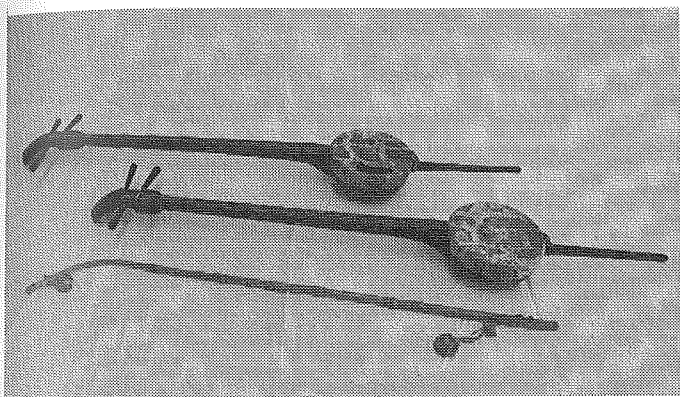
荒 焼 水 甕



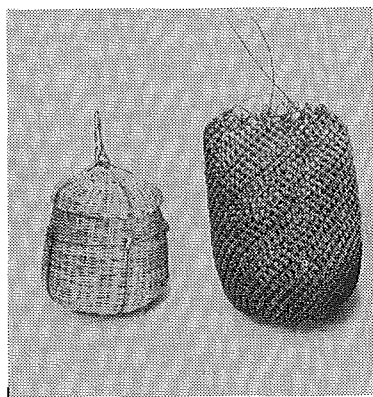
南 支 系 南 蛮 甕



灰 釉 香 炉



琉球胡弓



ピラフ (かずら箱) (左とアンディラ
(編み袋))



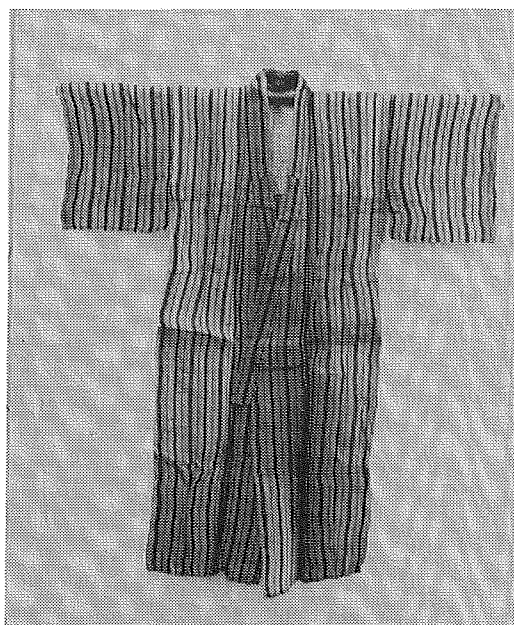
マーグ (茅容器) とサシ (柄杓)



酒甕類



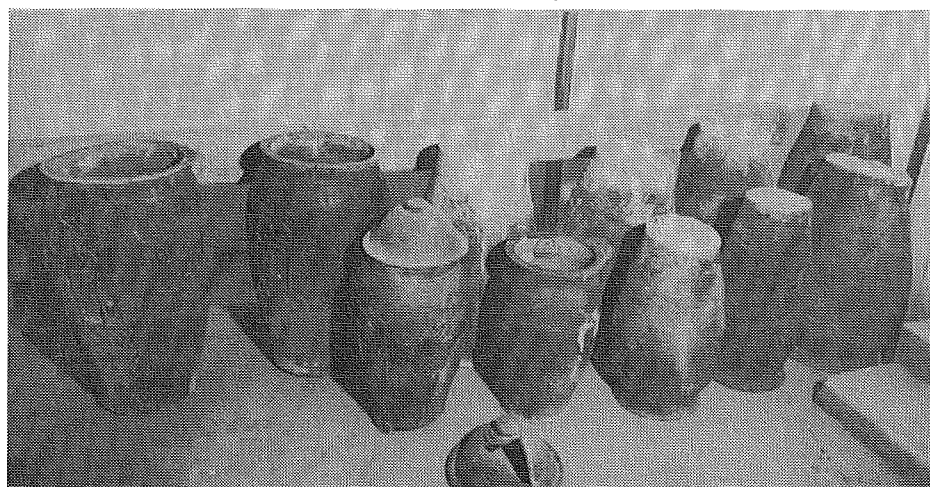
紺地 絢着物



芭蕉経稿着物



上焼御殿型厨子壺



荒焼壺型厨子壺

博物館主催行事

びんがた風呂敷と南蛮壺展

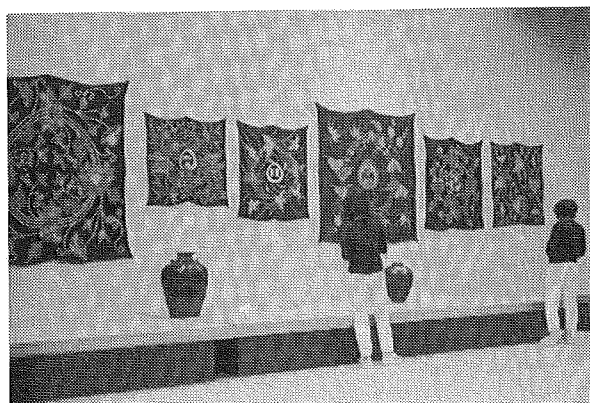
期 間 1973年4月11日～5月27日

会 場 第2陳列室

びんがたには、型紙を用いる「型染め」と、直接糊を置いて模様をつくりあげる「筒引」の二つの手法がある。びんがた風呂敷は、後者の手法でつくられる。湖の線で囲まれた部分に色をさし、その上に糊を置いて防染した後、地を染める。地は普通琉球藍で染める。その後で糊を洗い落とせば出来上がりである。生地は麻や木綿が多い。

模様は松竹梅、鶴亀、牡丹、菖蒲などが好まれる。ただし、鶴亀模様は型染めで、松竹梅と組み合わせて描かれる。布地いっばいに松竹梅、牡丹、菖蒲などを輪状に描くのが普通で、中に鶴亀が入るもの、定紋が入るものもある。太く流麗な線と大柄な模様は、型染めびんがたとちがった独得の味を持っている。びんがた風呂敷は、結婚式や清明祭などの祝儀や行事に使われたという。

なお、風呂敷は壁面に展示し、陳列台には外来の南蛮壺6点を陳列して花を添えた。これらは、沖縄で陶器の製法がまだ発達しない頃、シャムや南支那あたりから酒の容器として輸入され、沖縄の陶法にも影響を与えた陶器である。



展 示 風 景

出 品 目 録

1. びんがた風呂敷

番号	名 称	寸 法(cm)	番号	名 称	寸法 (cm)
1	松竹梅鶴亀模様風呂敷	110×106	14	菖蒲模様風呂敷	153×141
2	藍型松竹梅鶴亀模様風呂敷	154×142	15	松竹梅に一ツ巴二の字家紋風呂敷	87×96
3	松竹梅模様風呂敷	110×105	16	牡丹模様風呂敷	107×107
4	牡丹模様風呂敷	196×198	17	梅模様風呂敷	147×150
5	松竹梅模様風呂敷	111×112	18	藍型牡丹模様風呂敷	80×94
6	二巴松竹梅模様風呂敷	142×128	19	松竹梅模様風呂敷	99×78
7	松竹梅模様風呂敷	132×140	20	松竹梅鶴亀模様風呂敷	78×78
8	牡丹模様風呂敷	149×145	21	松竹梅模様風呂敷	96×99
9	松竹梅鶴亀模様風呂敷	76×73	22	牡丹模様風呂敷	108×112
10	松竹梅模様風呂敷	93×95	23	松竹梅鶴亀模様風呂敷	162×162
11	菖蒲模様風呂敷	113×113	24	緑地牡丹模様風呂敷	138×142
12	牡丹模様風呂敷	117×107	25	牡丹模様風呂敷	170×152
13	牡丹模様風呂敷	149×145	26	菊模様風呂敷	90×85

2. 南 蛮 壺

シャム系南蛮壺 2点
南支系南蛮壺 3点
薩摩系南蛮壺 1点

戦前の沖縄写真展

期 間 1973年9月21日～10月21日

会 場 第2陳列室

50年前、大正年間に鎌倉芳太郎氏（型染の人間国宝）によって撮影・保存された首里城・円覚寺を中心とする貴重な写真資料の展示会は、サントリー美術館及び当館の共催により昨年2月6日～3月12日にわたって当館で展示され、好評のうちに閉会した。

これに展示された写真は鎌倉芳太郎氏とサントリー美術館のご厚意により、すべて当館に寄贈された。こ



展 示 風 景

の内容と同じ展覧会は、5月15日の復帰を記念してサントリー美術館でも行なわれたが、これらの写真も一括して館に寄贈された。

この度、新たに寄贈された写真の中から当館の企画によって展示構成を、首里城、円覚寺周辺、首里、那覇風景、壺屋、波の上、辻原墓地等の3つのコーナーに設けて分類展示した。

戦前で失われた文化財を他府県の観光客に紹介するとともに、前回来館する機会に恵まれなかった県民に、郷土の文化財に対するより一層の認識と自覚を与え盛況を呈した。

主な出展内容

○ 首里城・円覚寺周辺 40点

首里城正殿・首里城南殿・白銀門・歓会門・守礼門・中山門・園比屋武御嶽、首里城全景、円覚寺三門・左掖門・仏殿本尊・十六羅漢像・他28点

○ 首里・那覇風景 10点

那覇綱引図・酒造家・首里風景・首里及那覇全景図屏風・他6点

○ 壺屋・波の上辻原墓地 8点

壺屋の上り窯の火口・50年前の壺屋の陶工・波の上神宮体・辻原墓地・他4点

失われた国宝・円覚寺展

期 日：1973年11月13日～1974年1月20日

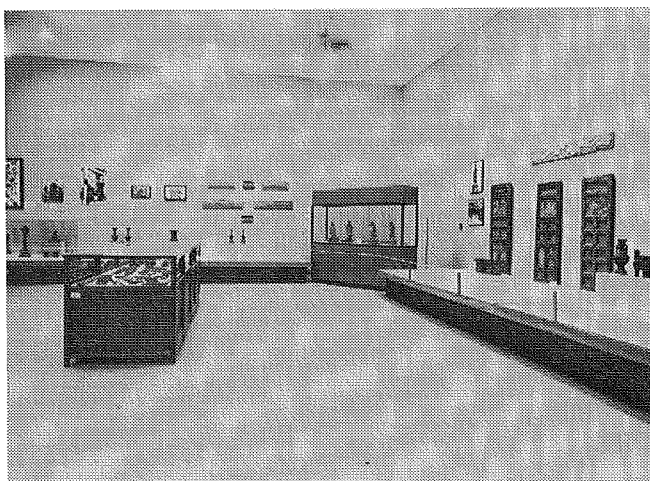
会 場：第2陳列室

首里の円覚寺は1492年から3か年の日数を要して建立された沖縄第一の壮麗な寺院であった。鎌倉の円覚寺にない、七堂伽藍の制を備えた禅寺で、京都南禅寺から移住して臨済宗を沖縄に伝えた僧芥隠が開山住持となり、その後、多くの名僧が輩出した。

戦前までは、尚王家の菩提寺としてその偉容を誇っており、この円覚寺だけでも、9件の国宝指定の建造物があったが、借しくも、去る第二次世界大戦により、放生橋を残して、ことごとく灰燼に帰した。

戦後、その焼け跡から当館が一般住民の協力を得て文化財残欠の収集活動を展開したが、そのときの収集品が当館に保存されている。

今回はその中から一部を選び、「一失われた国宝—円覚寺」が浮き彫りにされるようにと五十年前、鎌倉芳太郎氏撮影の写真と組み合わせて展示した。



展 示 風 景

出 品 内 容

1	仏殿梵鐘	20	牡丹彫刻仏間羽目（残欠）(2)
2	唐獅子彫刻仏間羽目（残欠）2枚	21	銅製花瓶
3	白 象	22	花 立
4	龍淵殿梵鐘	23	文殊菩薩坐像（残欠）
5	礎 石	24	光 背（残欠）
6	鬼瓦の残欠（龍淵殿）	25	沈金椀
7	三足銅香炉	26	茶 托
8	欄間羽目〔鳳凰(2) 龍(1)]	27	本尊前神立（残欠）(2)
9	獅子頭部（残欠）	28	白象（普賢菩薩騎乗のもの）
10	木 魚	29	莊嚴国土(扁額)
11	四足銅香炉	30	金剛力士立像（手・足の残欠）
12	銅製花瓶	31	龍淵殿持送
13	仏間羽目（雲文）	32	円覚寺に題す（拓本）
14	鳳凰彫刻仏間引戸（透かし彫り）2枚	33	円覚禅寺記（拓本）
15	朱塗三方（三巴文）	34	本彫残欠（15片）
16	龍彫刻仏間引戸（1枚）	35	龍淵殿扉透かし彫り残欠（32片）
17	十六羅漢像のうち（4体）	36	金剛法会図（鎌倉芳太郎氏模写）
18	須弥壇下羽目浮彫（4枚）	37	その他
19	朱塗燭台		※ 写真資料 35葉

職員の活動状況

(1973年1月～12月)

1. 出張及び調査研究

- 1.19 酒造用具受領のため糸満へ(新田・上江洲・黒島)
- 1.24 酒造用具受領のため糸満へ(新田・上江洲・宮城)
- 2.15 厨子甕受領のため宜野湾へ(新田・上江洲)
- 2.16～21 民俗調査のため久米島へ(上江洲)
- 2.25 山田焼の調査のため恩納村へ(宮城)
- 2.27～ 3.2 八重山博物館の視察並びに文化財資料の調査のため石垣へ(新崎)
- 3. 2 海洋博起工式出席のため本部町へ(館長)《依頼出張》
- 3.22 糸数佐南原遺跡の調査のため玉城村へ(新田)
- 4.16～ 5.18 東南アジア・インド・ネパールの陶磁器調査(宮城)《私費》
- 5. 3～ 5. 5 日本考古学協会総会及び研究発表会出席のため東京へ(新田)《私費》
- 5.11 知花後原遺跡の調査で美里村へ(新田・上江洲・渡名喜)
- 5.16～18 九州博物館協議会理事会出席のため鹿児島へ(館長)
- 5.28～ 7. 7 昭和48年度博物館職員講習受講のため東京へ(新田)
- 5.28～ 6. 2 第3回庶務主任者研修会出席のため神奈川県へ(黒島)
- 5.28 北部縦貫道路周辺の文化財調査(上江洲)《依頼出張》
- 6.10～ 6.16 全国博物館学芸員研修大会出席のため石川県へ(上江洲)
- 7.11～ 7.17 伊平屋・伊是名の民具調査へ(上江洲)《依頼出張》
- 7.19～ 7.21 旧久志村一帯の民具調査へ(上江洲)《依頼出張》
- 7.30～ 8. 1 歴史資料調査説明会出席のため熊本県へ(宮城)《依頼出張》
- 8. 4～ 8. 9 海洋博県出展並びに国出展の会議に出席のため東京へ(館長)《依頼出張》
- 8. 7 国頭村安田のシヌグ祭見学へ(上江洲・宮城)
- 8. 8～ 8.14 久米島北原貝塚発掘調査に参加(新田)《依頼出張》
- 8. 8 美里村の古窯調査へ(宮城)
- 8. 9 読谷村の古窯調査へ(宮城)
- 8.10 恩納村の古窯調査へ(宮城)
- 8.14～ 9. 1 日本博物館協会主催のヨーロッパ博物館・美術館視察旅行に参加(渡名喜)《私費》
- 8.18 碎石に伴う遺跡保護調査のため具志頭へ(新田)《依頼出張》
- 8.23～24 漁村緊急調査で糸満へ(上江洲)《依頼出張》
- 8.24 碎石に伴う遺跡保護調査のため具志頭へ(新田)《依頼出張》
- 8.25～27 南島民俗語彙研究会出席のため鹿児島へ(上江洲)《依頼出張》
- 9. 1～9.15 久米島北原貝塚発掘調査に参加(新田)《依頼出張》
- 10.29～11.4 八重山(石垣・黒島)の民具調査へ(上江洲)《依頼出張》
- 11.11～18 全国博物館長会並びに博物館大会に出席、資料購入交渉のため神戸・福岡へ(館長)

11. 9 芭蕉布調査で今帰仁村へ（渡名喜）
 11.15～16 民具調査のため今帰仁，大宜味村へ（上江洲・渡名喜）
 11.26～12. 2 九州博物館協議会研修大会参加および九州3県博物館視察（渡名喜）
 12. 4～12. 7 資料収集と遺跡調査のため北部，伊江島へ（新田）

2. 著作・論文

- 1.13 （名品紹介）円覚寺山門十六羅漢像（「教育沖縄」No.3）（宮城）
 3.20 沖縄の先土器文化（「琉球の文化」第3号）（新田）
 3.20 沖縄の民具（東京慶友社刊）（上江洲）
 3.28 （名品紹介）黒塗螺鈿雲龍文内金箔蓋付椀（「教育沖縄」No.4）（館長）
 4.30 沖縄古窯出土陶片の理化学的分析（「沖縄県立博物館報」No.6）（宮城）
 4.30 コウまつり督見（「沖縄県立博物館報」No.6）（上江洲）
 5.10 特集・1972年の考古学会の動向・南西諸島（「考古学ジャーナル」No.81）（新田）
 6.25 沖縄の心と紅型（「古美術」41号）（館長）
 7. 1 沖縄の植物染料について（「自然と文化」14号）（館長）
 7. 5 アジャンタ石窟の壁画をみて（造形おきなわ」No.4）（宮城）
 7. 2 2週間に1回沖縄タイムス紙「唐獅子」に随想連載開始（1年間）（渡名喜）
 7. ～10 琉球新報紙「おち穂」に連載（8回）（上江洲）
 7.31 （名品紹介）素焼御殿型厨子甕（「教育沖縄」No.5）（上江洲）
 8. 1 沖縄の古窯（「用と美」No.9）（宮城）
 10.20 沖縄の古武術（「琉球の文化」第4号）（宮城）
 10.20 やきもの見てある記—台湾・タイ・インド・ネパール（「琉球の文化」第4号）（宮城）
 11. 1 沖縄県立博物館紹介（「用と美」No.10）（宮城）
 12. 琉球焼（「グランド現代百科辞典」第20巻）（宮城）
 11.24 浦添貝塚の保存をめぐる（「南島考古だより」No.11,12）（新田）
 12.25 （名品紹介）釘彫染付魚文皿（「教育沖縄」No.6）（宮城）
 12.29 壺屋のカーミスーブ（「やちむん」第4号）（宮城）
 12.29 土器と陶器の周辺（「やちむん」第4号）（新田）
 12.29 芭蕉布と荒焼（「やちむん」第4号）（渡名喜）
 12.29 知花民俗小記（「やちむん」第4号）（上江洲）

3. 制作活動

5. 1～ 5. 7 やちむん会展出品（油絵）（於 沖縄物産センター画廊）（宮城）
 5.24～ 6. 5 第39回旺玄展出品（油絵）（於 東京都立美術館）（宮城）
 11.26～11.30 第7回沖縄旺玄展出品（油絵）（於 沖縄タイムスホール）（宮城）
 12.27～12.31 第1回二人展出品（油絵）（於 沖縄物産センター画廊）（宮城）

4. 講演

- 11.16 沖縄の歴史と文化について（対象・群馬県青年国内研修団一行）（於 糸満青年の家）
 （新田）

二 階 増 築 ニ ュ ー ス

二階増築の経過

- 昭和46年 7月 9日 文部省社会教育局青少年教育課課長補佐森田清氏来館。二階増築計画について話す。
- “ 8月 5日 企画局予算部で日政援助（二階増築）の予算説明をする。
- “ 8月 6日 文部省社会教育課長鹿海信也氏来館。現況及び二階増築計画を説明する。
- “ 8月 7日 二階増築計画の書類（見積書、図面添付）を提出する。
- “ 9月12日 山中総務長官来館。博物館二階増築費についての要請書を手渡す。
- “ 9月14日 二階増築の国庫補助について文部省調査官へ説明する。
- “ 9月17日 衆議員文教委員会主任調査官大中臣信令氏来館。二階増築について説明する。
- “ 10月11日 文部省大臣官房会計課総務班来館。主査矢口敬司氏、主査大井戸佐司鷹氏へ二階増築について説明する。
- 昭和47年 6月14日 昭和47年度社会教育施設整備費補助金交付の内示を受ける。
- “ 6月15日 教育長あてに二階増築設計並びに工事発注契約等の準備について依頼文書を提出する。
- “ 6月27日 教育長より土木部長あてに二階増築工事の調査設計及び工事の執行について依頼文書を提出する。
- “ 6月28日 設計委託料の予算を土木部へ分任手続きをする。（設計委託料）
- “ 7月 1日 館長立合いで土木部建築課福地氏譜久村氏我那覇設計士が現場を調査する。
- “ 8月15日 既設の建物の設計者我那覇氏と随意契約（設計料¥5,008,922 円）をし、設計が着手された。
- “ 9月 5日 教育長より土木部長あてに二階増築工事の調査設計及び工事の執行について依頼文書並びに工事請負等の予算の分任手続きをする。
- “ 9月22日 設計者より土木部建築課へ博物館二階増築工事の設計書が提出される。建築課による設計審査調整が始まり、10月上旬に設計審査調整終る。
- “ 10月12日 県知事より文部大臣あて昭和47年度社会教育施設整備費補助金交付申請書を提出する。
- “ 11月10日 博物館協議会を開催し、二階増築の件についてこれまでの経過を報告する。
- “ 11月18日 二階増築工事の予算執行について知事決裁が得られる。
- “ 11月24日 建築課の譜久村氏によって12業者に対し二階増築現場説明が行われた。
- “ 11月28日 建築課で指名業者（Aクラス）12業者に対し、二階増築工事の第1回入札が行われた。（落札者なし）
- “ 12月18日 昭和47年度社会教育施設整備費補助金交付決定（通知書）があり、資金別は国が¥25,621,000 円を補助し、沖縄県が¥76,863,000 円負担することになった。
- 昭和48年 1月 9日 建築課で工期を標準工期とするとの条件で第2回の入札に付したが、建築資材その他諸経費の急騰の折、落札せず、そのため建築課長、博物館長をはじめ関

昭和48年 2月 1日	係者が業者への説得を続けたが、大分難航した。
昭和48年 2月 2日	業者への積極的な働きかけで漸く小波津組と随意契約(¥87,310,000円)を結ぶことが出来た。
昭和48年 2月 27日	増築工事着手。
昭和48年 3月 2日	県知事より文部大臣あて、昭和47年度社会教育施設整備費補助事業延期承認の申請手続きをする。
昭和48年 3月 25日	簡易生命保険積立金を借り入れのため起債計画書を提出する(借入金5,400万円)
昭和48年 4月 19日	教育長より沖縄開発庁沖縄総合事務局長あて昭和47年度社会教育施設整備費補助事業の繰越手続きをする。
昭和48年 6月 5日	沖縄開発庁沖縄総合事務局長より上記の翌年度への繰越の件について昭和48年3月31日付で承認される。
昭和48年 10月 23日	文部大臣より昭和47年度社会教育施設整備費補助事業の延期について承認される。
昭和48年 11月 28日	博物館協議会を開催し、二階増築の件について、これまでの経過を詳細に報告する。
昭和48年 12月 15日	竣工。
昭和48年 12月 15日	県知事より文部大臣あて昭和47年度社会教育施設整備費補助事業実績報告書を提出する。

二階増築に要した経費

事 項	金 額	備 考
建築工事費	87,310,000円	左記工事関係に国庫補助金25,621千円が含まれている。
機械工事費	9,240,000円	
電気工事費	5,600,000円	
設計委託料	5,008,922円	
計	107,158,922円	

増設された展示室その他の延面積

室 名	定 数	延 面 積	備 考
第3室(歴史)	1	265㎡	
第4室(民俗)	1	435	
第5室(陶磁器)	1	170	
ロ ビ ー	1	257	
便 所 そ の 他		445	
計	4	1,572	

展 示 計 画

第1室(美術工芸)

2階増築前の陳列室は、この第1展示室と第2展示室の2つだけであり、しかも第2展示室は特別展示室としてもっぱら特別展に用られた。平常展示は残る第1展示室のみであったため、考古資料や民俗資料の大半は倉庫に眠り、美術工芸品の展示も思うにまかせない有様であった。ところが、今回2階が増築さ

れたことによって展示室が3室増え、そのうち2室が歴史・考古と民俗資料の展示室、残りの1室が、陶磁器を中心として展示する部屋になったため、第1展示室では今回から書跡を含めてもっぱら美術工芸資料（陶磁器を除く）を展示することになった。

沖縄の美術工芸はいくつもの特質をもっている。第1にあげられるのは種類が多岐にわたっている点である。絵画、彫刻、建築、漆器、陶器、染織など他府県に見られない多彩な内容を誇っている。しかもその各々が、またいくつかの種類や技法をもっている。たとえば漆器の技法には、朱塗りまたは黒塗りされた器物に線を彫って模様をつくり、そこに金箔を埋め込んでいく沈金、あるいは漆の表面に貝片を張り込めて色彩やかな絵模様をつくりだす螺鈿（らでん）、さらには沖縄独特の漆モチを張りつけて模様をつくる推錦（ついきん）などがある。

織物では糸芭蕉の繊維で織られる芭蕉布、首里で織られる格子に紺の美しい手織や独特の浮織の効果を出すロートン織あるいは南方の織物の影響を受けたといわれる読谷山花織、泥染めによる焦茶色が何ともいえない味わいをもつ久米島紬、さらには紺の麻地に細い紺で知られる宮古上布、そして白の麻地に紺の八重山上布などが、あげられる。芭蕉布はかつては全島どの家庭でも織られたが、他の織物はそれぞれの地域で独自につくられたものであった。

これらの工芸品あるいは民芸品の素材はそのほとんどが、沖縄の島々のものであった。沖縄の工芸品や民芸品が、沖縄の明るく美しい気候風土に調和しているといわれるのは、何よりも素材自体が、島のものであるということによるだろう。沖縄の美術工芸の特質としては、ほかに日本や中国、南方など周辺諸地域から影響を受けているということもあげられる。

沖縄の美術工芸品の種類や手法の豊かさ、島々の自然と見事に調和した美しさ、味わい深さ、あるいはその歴史的社会的背景などをできるだけ多くの人びとに知ってもらえるような展示をするために、わたしたちはいっそうの努力をしていくつもりである。

第2室（特別展示室）

この展示室は従来「特別展示室」として臨時的展示に利用して来た。過去6年間の年間平均利用回数は13件で、最高6ヶ月の長期展示をしたこともある。13件のうち5件までは当館の主催である。他の8件は外部団体からの使用願い出によって、絵画展、染織展などを催して来た。

当館主催のばあいは、民俗資料、書画、染織などの館蔵品を展示したが、そのうちの何回かは他団体との共催による古美術展、写真展、陶磁器展、民俗資料展なども催して来た。2階増築によって館蔵品によるものは、ほとんどが平常展になるので、今後は各室に展示した中で不十分な部分を補っていく部屋にしたい。また従来どおり外部団体等に対して可能なかぎり開放し、絵画、染織展等の便宜をはかっていき、新しい文化の創造面も強力に推進していきたい。

第3室（歴史）

この展示室は、歴史、考古資料を単に展示するのではなく、時代的・系統的展示を中心に各時代の生活や文化を理解せしめ、郷土のあゆみをとらえようと試みたものである。しかし、実際は展示予算が乏しく、そのうえ、施設の狭隘や資料の貧弱さ、さらに研究の不十分さが災いして、ねらいには程遠い展示内容になってしまった。年次計画によって、これを改善し、展示内容を充実していきたい。

展示資料は、洪積世の末頃、未だ沖縄が大陸と陸橋でつながっていた頃、この島々に初めて人類が登場した先土器時代から、貝塚時代を経て、10～12世紀頃鉄器が伝来し、従来の狩猟漁撈の経済生活から

農耕社会へと移行して、原始共同体は崩壊する。原始社会から古代社会に移行する過渡的な時期を考古学的には「グシクの時代」または「晩期」ともいわれるが、この時期迄の資料を扱う。

展示構成は、実物資料を中心に、写真資料、年表、図表その他復元図等を展示して、できるだけ各時代の特色と生活背景が想定できるようにする。将来は生活復元図も考設して展示してみたい。効果的な音響装置や照明も工案されなければならないとおもいますが、現段階では諸種の事情で無理である。解説はパネルとラベルによって行なう。

テーマ及び主なる展示資料は、はじめに「先土器時代」というテーマで、先土器時代の遺跡と遺物の写真を下町第一洞穴遺跡や港川遺跡の発掘成果に基いて紹介する。第2は「貝塚の時代」というテーマで、新石器時代の沖縄の貝塚の分布と出土遺物等を展示し、原始社会の生活様相を理解せしめるようにつとめる。第3のテーマは、「グシクの時代」とし、原始社会から古代社会に移行する過渡的な様相を呈するグシク出土の遺物を展示する。

その他、特別コーナーとして、「北原貝塚」展を設ける。北原貝塚は、久米島具志川村字北原に所在する後期砂丘の貝塚であるが、久米島飛行場拡張工事によって破壊されることになり、止むなく緊急発掘された遺跡である。この貝塚は、開元通宝を始め五銖銭等多量な海外交渉資料が出土し、また住居址と推定される遺構が露出してこの時期の歴史や生活を研究するうえで、かけがえのない貴重な遺跡であった。

最近、乱開発によって、郷土の自然や文化財（埋蔵文化財、民俗資料等）が破壊される危機に瀕しており、県民の力によってこの偉大なる文化遺産を護り、保存する責務がある。

尚、今回の二階増築記念「考古、民俗」展には考古資料を中心とした、その時代の生活と文化の紹介にとどめたが、次回からは総合博物館という性格上から、郷土の歴史と文化を全時代にわたって紹介展示する必要があるのでこのような企画での展示を行ないたい。この展示室として、一階の第1展示室が適当とおもわれるが、施設の構造上現段階では、内部改装をする等予算上困難な問題があるので、当分は第3展示室で行ないたい。

特別コーナーに展示予定の「北原貝塚」展は、文化課主催の「リウボウ」における展示会と時期が揃ったため、止むなく、中止せざるを得なくなり、そのコーナーに勝連城出土の古銭・装飾品及び先島の考古資料を展示紹介することにした。

第4室（民俗）

全室を「民俗展示室」とし、壁面はガラス戸を除いた展示ケースになっている。ガラス戸なしの方が民俗展示室のばあい、物が身近かに見られ、しかも異和感を起こさせないことはよく言われて来たことである。民俗展示室は歴史考古展示室と階段によってつなぎ、右廻りに(1)農耕具（耕耘、収穫）(2)運搬、畜産用具、(3)山樵、狩猟用具、(4)漁具、(5)紡織用具、(6)住居具、(7)着用具、調理、飲食具の順で展示する。

壁面には民具の使用風景写真や説明パネルを張り展示品もできるだけ用途別にしかもセット展示でなければならない。説明も各点ラベル表示の煩雑をさけ番号表示による説明方法を採用したい。沖縄各地から収集した数百点の民俗資料を機能別展示することによって、沖縄の庶民生活を理解させ、児童生徒の学習にも役立てたい。

第5室（陶磁器）

沖縄の文化のなかでも、とりわけ工芸の特異性、優秀性については、これまで何回となく論ぜられ、かつ高く評価されてきた。

その工芸の一翼をになうものに陶器があげられる。

沖縄の文化全般にいえることであるが昔から地理的条件を有利に生かしつつ、海洋民族として万里の波濤をもものともせず、周囲の国々と往来し、いろいろな文物を輸入、咀嚼して、今日みるような沖縄独特な工芸文化を確立してきたのであった。

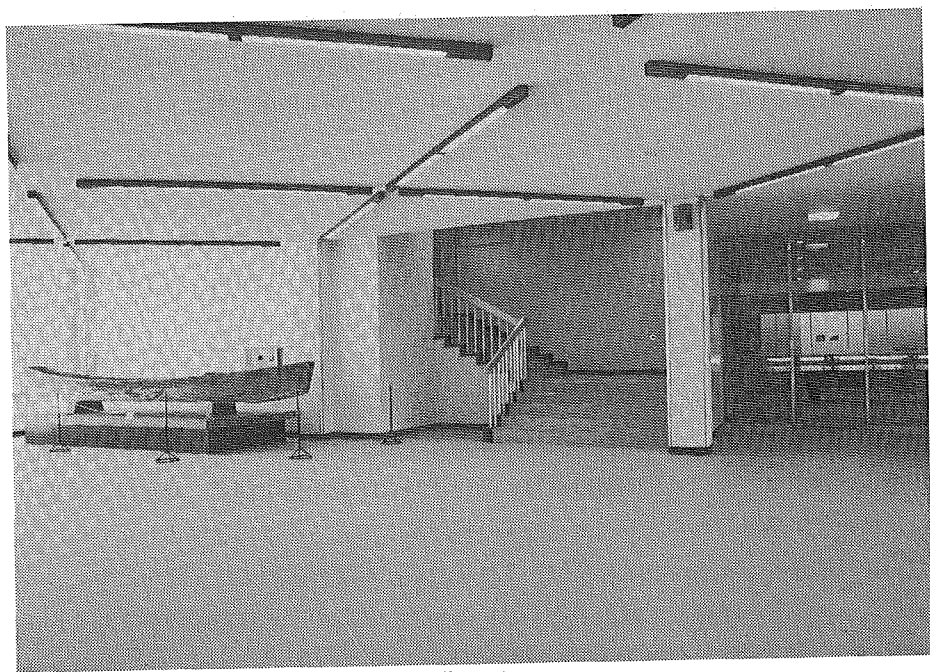
陶磁器とて決して例外ではなかった。数多くもたらした外来陶磁器をはじめ、その影響を受けながら、一方では積極的に中国や薩摩あたりに出かけて陶技をみがき、独特な琉球のやきものを創りあげてきた。

さて、二階増築に伴ない陶磁器展示室が独立するので、その展示の実際について二、三述べてみたい。展示室入口附近の壁面を利用して沖縄のやきものについての概説やその年表、写真（登り窯、制作工程その他）古窯分布図等の資料を掲げ、陳列中の陶磁器がよりよく鑑賞理解出来るよう工夫すること。

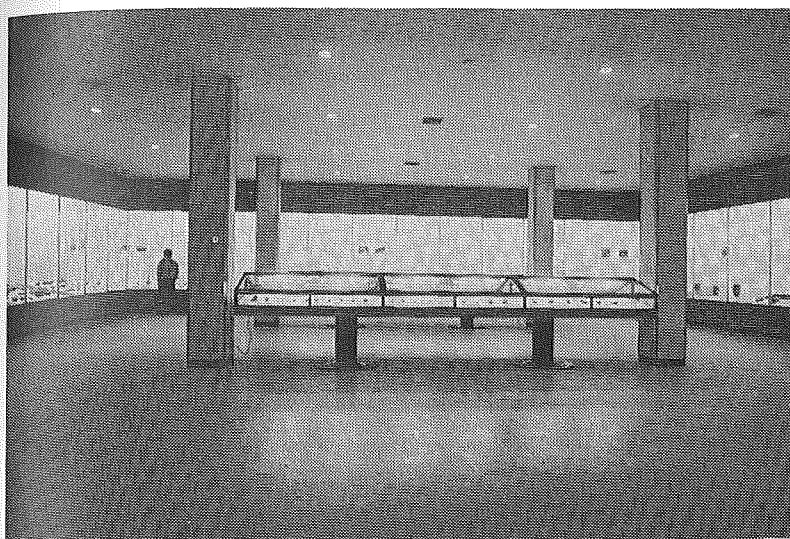
更に、展示室内には、土器、上焼、荒焼の各種類をはじめ、外来陶磁器も補助的に展示する。とはいえ、陶磁器の流れをつかむのに欠かせない重要な意味をもつものである。

中央の三角ケースには、県下の各古窯出土陶片等の資料を出来るだけ、数多くだして、比較鑑賞出来るような配慮をしたいとも考えている。

陶磁器展示室設置に伴ない、従来、収集した資料を整理検討して収集のむらがあれば是正したい。と同時に、これを機会に購入出来るものは購入し、個人所蔵の陶磁器などの寄託も受けてより幅広い展示とその内容充実を図って行く計画である。



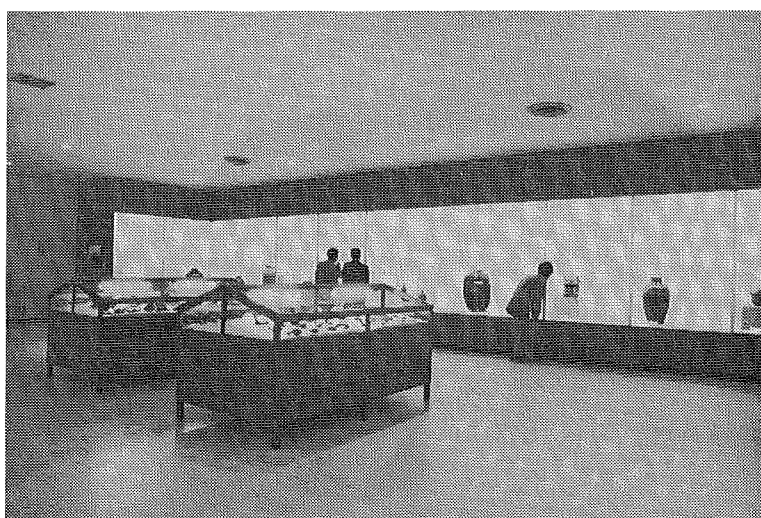
2 階ロビー



第3室 (歴史)



第4室 (民俗)



第5室 (陶磁器)

研究及び調査報告

古謡にみる生活の思想と信仰……………渡名喜明（37）

（資料紹介）

具志川市具志川城跡表採の考古資料について……………新田重清（48）

古謡にみる生活の思想と信仰

渡名喜 明

沖縄の古謡といえば、『おもろさうし』といわれるほどに、オモロということばは人びとに知られるようになっている。しかし、オモロに先行し、オモロ発生の基礎ともなったと考えられる種々の古謡に関しては、一般の人びとの関心はまだ薄いとみななければならない。

いま、研究者の間ではオモロ以外の古謡に対する関心が高まり、その研究成果にもすぐれたものが続出しつつある。こうした現状を背景にして生まれたのが、外間守善氏編による『南島古謡』（『日本庶民生活史料集成』第19巻、昭和47年11月発行）である。これは奄美大島から宮古、八重山にいたるわが琉球の島々に伝わるオモロ以外の古謡を初めて集成した力作であり、琉球の文学や民俗、宗教などを研究するうえで、非常に貴重な役割を果たすと考えられるものである。本稿は、この『南島古謡』所載の古謡を中心的にとりあげて、わたしたちの祖先の信仰や思想を解明しようとする試みのひとつである。

はじめにあげるのは、金武村金武に伝わる「御嶽にてのオモイ」である（原典は『諸間切のろくもいのおもり』）。

てにがうゑに のぼて	天の上に 登って
あめじまに のぼて	天島に 登って
もんちゃん	物種子
おろちめんしゅうち	降ろし給いて
じゅうぐわつがなれば	十月になれば
さねおろし	種子おろし
にんぐわつがなれば	二月になれば
みすじいさしうゑて	御筋差し植えて
しんぐわつがなれば	四月になれば
もいすずいにをがまって	盛り筋に拝まれて
ぐんぐわつがなれば	五月になれば
おはなばなをがまって	御花花拝まれて
ろくぐわつがなれば	六月になれば
ましらをがまれ	真白拝まれて
しらまししこおて	白神酒造り
おさげやびら	捧げましょ ⁽¹⁾ う。

このウムイ（オモイ）は内容構成上、三つの部分から成立している。まず稲の起源を述べる冒頭の部分があり、次に稲作の過程を述べる。最後に収穫した米やそれで造った神酒を神に捧げる祭の部分がある。気になるのは、天上に登って物種子を将来した肝心の主人公が不明だということである。

奄美大島から宮古、八重山にいたるわが琉球の島々の稲の起源説話を見ると、稲の将来者や由来の場所に種々のバラエティが見られる。しかし、沖縄本島に限っていえば、鳥が（ニライカナイから）自身で将来したという形、アマミキヨが鳥を遣わしてニライカナイから将来したという形、そしてアマミキヨ自身がニライカナイ⁽²⁾あるいは天からこれを将来したという形の3つに分けることができる⁽³⁾。これらの説話と照らし合わせてみるならば、前記ウムイの内容上の主人公は、島の神話的始祖アマミキヨ⁽⁴⁾と考えてさしつかえないだろう。

まず稲の起源を述べ、それに続いて稲作の過程を語り、最後に収穫物を神に捧げる、という内容構成（以下「物種子由来形式」と便宜上呼ぶことにする）をもつ古謡は他にも大宜味村塩屋の「海神祭のおモイ」⁽⁵⁾、奄美大島に伝わる「あらはばなのおもり」、⁽⁶⁾「米ぬながね⁽¹⁾」、沖縄永良部島の「島建てシンゴ」⁽⁷⁾などがある。とくに高田カネ氏が伝承する「島建てシンゴ」は、⁽⁸⁾「島くぶだ国くぶだ」と称する神話的始祖による国土創成が永々と、しかし整然と説かれたあとに、稲の起源と稲作の過程およびその祭を語りあげており、神話学上もきわめて重要な価値をもつものである。このような内容構成をもつ古謡が見られることは、稲作を生業とする島びとたちにとって、豊作を獲得するためにはどうしても、稲の起源を聖地＝神の世界と結びつける必要があったことを示しているとみることができるだろう。

「ウムイ」についてであるが、このウムイと『おもろさうし』に収められているオモロとの関係について、外間守善氏は次のように述べている。すなわち、もともとウムイと呼ばれ、地方の神祭に密着し、人々の生活に寄り添いつつ神歌として育っていたものが、16世紀、『おもろさうし』が編纂された頃、中央的に再編され、変容したものがオモロである。内容的な違いとしては、「ウムイが、対語対句をつらね連続的、進行的にことがらを叙していくキューナの詩形、いわゆる対句法をとっているのに比べ、オモロは、連続性を断ち切ることによってある種の文学的緊張を、詩形として獲得しているという発展的要素を作っている」ことがあげられる。このオモロはそれ自身としては退潮していったが、それにくらべてウムイは、共同体の繁栄を願う祭式に絡みあっていまだに生きており、沖縄、奄美およびその属島に広く分布している。

さて、稲の起源についてこそ触れないが、その代りに、稲作の創始者がアマミキヨであることをまず述べて、そのあとに稲作の過程と祭を語りあげる古謡も少なくない。1713年編集の『琉球国由来記』に収録されている伊平屋島の「柴差のミセセル」をみてみよう。

イレキヤ、	(原意未詳)
イレキヤ、	(原意未詳)
ナマタコメ アラス	今に始まったことではない
ナマ(タ)コノメ アラス	今考案されたことではない
アマミキヨガ ハジメ	アマミキヨの 始めたこと
シネリキヨガ ハジメ	シネリキヨの 始めたこと
テルキヤチガ (カ) ナミヤ	テルキヤチの 金宮
ナデシニヨガ カナミヤ	撫で子仁屋が 金宮
ノロボコリ 大ゴロ	祝女誇りの 勝れ男
ヌシボコリ 大ゴロ	主誇りの 立派な男
角タカハ コノミヤヒ	牛を使い

足四ツハ コノミヤヒ
アラ田 ケコケギヨケテ
ソコ田 ケコケギヨケテ
十月ガナレバ ヨカル日ヨリエラデ
アマタネハ マキヲルチヘ
シラタネハ マキヨヲルチ
ツヤミツキ ナレバ
ツヤヨツキ ナレバ
ヲシュハカテ 植ヘトテ
ミヨウハカテ ワヘトテ
シラネサチヘ モヘツチヘ
赤根サチヘ 萌ヅチヘ
青タレテ モヘテ
シゲタレテ モタヘテ
八ヨダサチヘ ヲマラチヘ
十枝サチヘ アマヘヨヘ
五月ガ ナレバ
シラモ、ニ ナラバ
赤モ、ニ ナラバ
穂サキトテ
アマミキヨニ イセ祭スレ
穂本トテ
ノロ神ニ イセ祭スレ
真ニシ フキスレバ
真南風ノアヅラ ヲチツミ
真南風 吹スレバ
真ニシアヅラ 打ツミ
アブシカタ ワカラヌ
アキノエララ モツモツ
アキノ鎌 モツモツ
ハツマタニ 刈満ヘ
庭マデ 積アマス
オニカラヤ 又カラヤ
島尻ノ 国ノ根ノ
嵩ノ辻 森が辻
アヤハベル コセハベル
飛ヤヘシュヘ 舞ヤヘシュヘ

馬を 使って
新田 耕し耕して
底田 耕し耕して
十月になれば 吉日を選び
甘種子を 蒔き下ろし
白種子を 蒔き下ろし
月が三月に になると
月も四月に になると
潮を測って 植えて
濤測って 植えて
白根差して 萌え付いて
赤根差して 萌え付いて
青垂れて 萌えて
茂垂れて 榮えて
八枝差して 生まらして
十枝差して 茂らせて
五月に なければ
白熟みに ならば
赤熟みに ならば
穂先を取って
アマミキヨに 勝れ祭すれ
穂本をとって
祝女神に 勝れ祭すれ
真北風 吹きおれば
真南風の畦を 打って
真南風 吹すれば
真北風の畦を 打って
畦かた わからぬ
収穫の鎌を 持つ持つ
採り入れの鎌を 持つ持つ
ハツ俣高倉に 刈り満たし
庭まで 積み余し
それからは 又からは
島尻の 国の根の
嶽の頂き 杜の頂き
綾蝶 奇せ蝶
飛び合いし 舞い合いし

雨ヤフヨヒ コセヤフヨヒ

雨は降るし コセは降るし

アフヘ持ヤヘコウ

煽へ（傘）持ってこい

手ガサモチヘコウ

手傘持ってこい

「ミセセル」とは、琉球の古辞書『混効験集』によれば「ミスヅリ」と同義で、神託のことである。⁽¹⁰⁾しかし、最近の研究が明らかにしているように、内容上は人から神に祈願の意を述べる「オタカベ」や「ノダテゴト」との区別をつけがたい。ただ、このミセセルがオタカベやノダテゴトと同様に、オモロに先行する古い形式のものであることについては、研究者の意見は一致している。⁽¹¹⁾

ところで、このミセセルの詞書には、村々の拝所に酒肴や赤飯を供え、神女や村役人が祈願する、また家々では家屋敷や諸道具に柴（藪肉桂や桑の枝にススキをたばねたもの）をさして魔除けとし、赤飯をいただく、そしてこのミセセルは神女の屋敷で唱えられる、とある。『琉球国由来記』巻19の「各所祭祀」8具志川間切の条に、「柴差ノ事」として「八月従公儀日撰、拝ミ次第、次年ノ世加保（世果報＝豊年の事。引用者註）願、稲粟並萬作毛ニ、虫付不申為ニ、柴差ノ日、炊飯、火神並先祖靈前へ居テ、喰申也云々」とあることからわかるように、柴差祭は、次年の穀物の豊作を祈願する祭とみなされていた。したがって、ミセセルを神託とみるならば、前記柴差のミセセルは神女が神がかり状態で、自ら神として次年の豊作を予祝するか、来訪神が豊作を予祝するか、のいずれかであるだろう。ただし、内容に即しているならば、神女を中心として村人たちが、次年の豊作を祈願する祝詞的な神歌であったかとも考えられる。

すでに述べたように、このミセセルは、内容上3つに分かれる。まず初めに、以下に述べる稲作の過程が、単に作業の過程を事実として述べたものではなく、神話の始祖アマミキョが創始したものであることを述べる。次に稲作の作法を順を追って述べ、五月になって稲穂が出始めた頃、初穂を祖神アマミキョと神女に捧げる。そうしたからには稲は畦の形もわからぬほどに稔り、高倉に積み余すほどの収穫があることを述べる。「オニカラヤ、又カラヤ」以下は、収穫祭の光景を描いたものであろうか。ついでに述べるならば、5月に初穂をアマミキョと神女に捧げるというのは、今の5月の稲穂祭（5月ウマチー）に内容上つながるものと考えられる。

他の例をみることにしよう。次にあげるのは浦添村沢岐に伝わる「アマーウェーダ」である（原典は『琉球王朝古謡秘曲の研究』）。

あまみちゅがはじみぬ

アマミ人が始めの

しらみちゅがのたての

シラミ人が宣言での

くしと原巡ぐやい

後平原巡って

泉口さとうやい

泉口を求めて

あぶしかたかにやい

畦型に囲んで

なさきやらやなちよけて

（原意未詳）

角かたにこめあけてい

（原意未詳）

こんきやくはきうけてい

（小土粉はかきまぜて浮けて）

夏水につけやい

夏水につけて

冬水にうるしやい

冬水に降ろし

三日水さけやい

三日水（さけやい）

七口水さけやい
百十日なよりば
しらぢゃねやさし植えて
植えて三日なやうりば
しらねさちむはいたと
若々とはがしやうな
四月がなやうれば
こきやら南も吹あけて
五月がなやうれば
こはいろにもきやげて
神あしやげげらやい
をうない神めんかい
ふさちとうていおしゃけてい
六月がなやうれば
あきのかまこのめやい
しまのとぢゃ屋とやい
あさ露にかいないき
昼間日によやけて
夕すこいになやうれば
稲ふしゅに持ちあけてい
六つまたにんつみあまち
八つまたにんつみあまち
あしやげれんつみあまち
ていしまてもつんあきて
八かや田の主やのや十かや

七口水（さけやい）
百十日なれば
白種子を差し植えて
植えて三日したら
白根差し付き
若々（とはがしやうな）
四月になれば
（こきやら）南風も（吹あけて）
五月になれば
蒲葵色に熟み上げて
神アシャゲを造り
姉妹神の前に
穂先取り捧げて
六月になれば
収穫の鎌を作って
しまの（とぢゃ）雇って
朝露に刈り始め
昼間日に積みあげて
夕方になると
（稲ふしゅ）に持ちあげて
六ツ俣高倉にも積み余し
八ツ俣高倉にも積み余し
アシャゲまでも積み余し
天井までも積みあげて
八かや田の主は（やのや十かや）

内容構成は、柴差のウミとほとんど同じである。この「アマウエーダ」⁽¹³⁾はキューナの部類に入っている。同じくキューナで、この「アマウエーダ」に類するものに国頭村安田の「田の祝いのキューナ」、浦添村西原の「アマウエーダ」、玉城村百名の「坐グエーナ立グエーナ共通詞」⁽¹⁶⁾などがある。⁽¹⁴⁾これらはいずれも、まずアマミキョ⁽¹⁵⁾（シネリキョ）が稲作の創始者であることを述べ、次に稲作の経過を述べ、初穂か収穫した米で造った神酒を神に捧げることを述べている点で共通している。この形式をとる古謡には他に、東村平良の「田ぬウミ」⁽¹⁷⁾がある。伊是名村勢理客の「テイルクロ」⁽¹⁸⁾もこの部類に入るだろう。このような形式を便宜上「アマミキョが始め形式」と今後呼ぶことにする。

キューナの特徴に関しては、外間守善氏は次のように述べておられる。「キューナは、祭式と結びついている」他、「謡い手、伝承者は女性であり、単純な集団舞踊を伴っている。」「新築、旅立ち、進水式、雨乞い、稲祭り、その他の生産労働など、共同体社会の幸福と繁栄にかかわることがらを、対語、対句をつらね、連続的、進行的に叙述していく（いわゆるキューナ形式—引用者註）こともまた文体的特徴としてあげることができる」⁽¹⁹⁾。

さて、稲作の創始者に関していえば、少なくとも沖縄本島に限定するという限り、伝承上もまた古文献の記事を見ても、アマミキヨということになっている。たとえば『琉球国由来記』巻13「各所祭祀」2の知念城内之殿の項には「知念村ニ有一田。内川ト云。故ニ、根人モ川内ト名ヅク、然ニ、今誤テ、幸地ト云フ。此田ニ昔、阿摩美久、稲ヲ為蒔始ト也」とある。同書の玉城間切富名腰村の条では、アマミキヨが稲種子をギライカナイから持ち来たり、その作り方を百名村の人に教えた⁽²⁰⁾とされている。また別の伝承によれば、稲穂をくわえて飛んでいた鶴が暴風に会って、玉城間切に落ちて死んだ⁽²¹⁾、その稲穂が芽を出したのをアマミキヨが見て、受水走水（ウキンジュハイソジュ）に移し植えたという。これらの伝承は、さきに列挙した神歌と内容上一致している。⁽²²⁾

さきにわたしは、稲の起源と稲作の過程、およびその祭を謡うことは、豊作を獲得するうえで必要なことであったのではないかと、ということ述べた。同じように、稲作の創始者をまずあげ、次にその稲作の経過を謡い、そのあとで稲の祭をするという三段階の手順を謡うことによって、豊作が約束されるという信仰もまた島びとたちにはあったのではないかと思われる。しかも、その両者は内容上同じことを指すとみたいのである。というのは、いずれも自分たちの行なう稲作が神の世界に由来するものであり、そうであるからには豊作は疑えない、とする信仰の異なった表現と考えられるからである。

それだけではない。神話の始祖の稲作の経過を謡いあげること、あるいは神話で謡われている事柄が実際に行なわれていた時代の稲作の経過を謡いあげるとは、すなわち、始祖の作法通りに、あるいは神話の時代に行なわれていた通りに稲作を行なえば、豊作はまちがいないという信仰をも物語っていると考えられるのである。『佐銘川大ぬし由来記』にある「屋比久大やくもい」という男の出世談は、この信仰の存在を裏づけるものである。

屋比久大やくもい立身は、三歳の時御父君御他界被召（彼は尚徳王の次子といわれる一引用者注）、御世代りの折ふし乳母の抱き、佐敷苗代先祖屋敷へ罷下り、あふし立て、成人仕りければ、忠孝の道怠らず、農業にも達し給ふ。其比間切中出来稲不熟ケ間敷有之、貢米未進、多々滞来候に付、御見分奉行御通之時、彼屋比久大やくもい作立稲は、田数致順熟、餘人之稲不熟仕候儀は、何之事にてかく有或、と御尋被仰下候。即時御返答に、私何ぞ巧者にて無御座候得共、昔あまみきよ伝の御意拜で、稲種子夏水につけて冬蒔入、百十日より廿日迄植付候故、何ぞ不熟は不仕、と申上候。依之耕作方の下知役被仰時百姓中熟談に申付、右通植付させ候には、次夏よりは順熟豊満仕、三ヶ年に未進貢米皆納仕させ候。為御褒美屋比久地頭所給、屋比久大やくもいと云。（傍点引用者）⁽²³⁾

そういえば、浦添村沢岐の「アマウェーダ」にも「夏水につけて、冬水に降ろし……百十日なれば、白種子を差し植えて」と謡われていた。アマミキヨの稲作法は島びとたちの稲作のいわばモデルとなっており、それを伝えるのは神歌であった。

古謡では、アマミキヨの時代、祖神の時代は「アマン世」、「あまみや」、「しねりや」、「むかし」「けさし」などと呼ばれる。たとえば、久米島仲里間切宇根で大雨乞の時に謡われたウミイをみてみよう。（原典は『仲里旧記』）

むかしはじまり

昔始まり

けさしはじまり

けさし始まり

あまみやはじまり

アマミヤ始まり

しねりやはじまり

シネリヤ始まり

せのくせにおれて
げをのもりおれて
おれておれなおちへ
あがさしぶおろちへ
あがもじはおろちへ
神のまねとよる
ぬしのまねとよる

せ野久瀬嶽に降りて
気の森に降りて
降りて降り直して
吾が神女を降ろして
吾が神女を降ろして
神の真似取り居る
主の真似取り居る

雨乞の祈願は、神話的始祖の時代に起源をもつものであり、その昔始祖が行なった作法通りに祈願するから雨を降らしてくれ、と祈るのである。祈願の対象は「火の神」、嶽々の神、「天の庭のかうじゃ主」、「ニルヤ大司・カナヤ若司」、「テルカハ・テルシノ（太陽神）」などである。別の例をみることにする。仲里間切島尻で唱えられたオタカベの一部である。

むかしからあるやに
けさしからするやに
あらさきのおみやに
まきよの根のまみやに
かみなゝそあとおゐて
すじやなゝそそろいて
神のまねすれば
ぬし（の）まねすれば
神のまねおとろしや
ぬしのまねやぐめさ
げにあれとも
だにあれとも
なけやたけおやまで
まうとたけさんどうて
たかべらば のだてらば
三日ではとうさ 四日ではとうさ
けふの日にたまふれ
夜くれのふにたまふれ

昔からある様に
けさしからする様に
あらさきの御庭に
マキヨの根の真庭に
神七十人集まりて
衆生七十人揃って
神の真似すれば
主の真似すれば
神の真似は恐しく
主の真似は畏れ多く
実にあれども
誠にあれども
なけや嶽敬まって
まうと嶽三度尊んで
崇べれば 宣立てれば
三日では間遠い 四日では間遠い
今日の日に給われ
夜暮内に給われ

また同間切儀間の平松御嶽で唱えられるオタカベでは「むかしからあるやに、けさしからするやに、あまみやからある屋に、しねりやからする屋に、大雨乞まねやべもの」と、祈願の模倣がはっきりうたわれている。⁽²⁶⁾

祈願だけではない。穀物の収穫祭もまた昔からの作法通りに行なわれた。

昔からあるやに
あまんからしちやるように
神遊び召しゃいん
しで遊び召しゃいん

昔からある様に
アマン世からした様に
神遊びし給い
シジ（神）遊びし給い

三日日からいぐまち
 四日日までとよまち
 積ぬ屏風ひちよて
 綾ぬ筵くならべて
 白御酒いぐまち
 神酒むやち
 うんさくしるまち
 しるんばなしきて
 黄金瓶かざてかざて
 玉の瓶かざて
 口口口ノログが
 神御待ち召せん
 神霊御待ち召せん
 いそぎそぎ神々
 をどりどり神々

三ケ日から準備し
 四ケ日まで鳴響し
 積の屏風ひちよて
 綾の筵並べ敷き
 白神酒準備し
 真御酒盛りて
 御神酒醸し
 白花醸し
 黄金瓶飾り
 玉の瓶飾って
 口口口祝女子が
 神御待ち給い
 神霊御待ち給い
 忙げ忙げ神々
 踊れ踊れ神々

(島袋源七「沖縄の民俗と信仰」)

島びとたちにとって、アマミキヨは祖神ではあったが、アマミキヨ自身は万能神ではなかった。稲と稲作の起源に関する別の伝承をみると、彼は久高島の浜川御嶽で鷺を遣わし、稲穂を給わるように天に祈願したら、その鷺がニライカナイから稲穂を三本くわえて帰ってきた、これを受水走水に蒔き、収穫した米で神酒を造って神を祭った、とある。アマミキヨのもつこのような二面的な性格は、非常に興味深いものではあるが、ここではこれ以上ふれないことにする。

次にあげる久志村久志のオモイは、昔あったことをそのままあった通りに謡ったものとみることもできなくはないが、むしろ昔行なわれた方法通りに、村の神女や男たちが舞を行なうことを謡ったものとみたほうがいだろう。

むかし けさし
 あたること しちやること
 びまのろ さしのろ
 おふごろ まごろこ
 こんぢゞて くりアきちて
 みすぢゞて こんぢゞて
 じゃっこくのと えのととりて
 かやウがま うえこめて
 いちころち さしころち
 おふなアび おしけて わかち
 しヨいもい まだまもい
 おしやけて

昔 けさし
 あったこと したこと
 ビマ祝女 サス祝女
 大男 真男子
 遮って (原意未詳)
 追い込んで 遮って
 (原意未詳) 猪の取手
 嘉陽洞穴に 追い込んで
 射ち殺し さし殺し
 大鍋 押しつけて 沸かして
 首里森 真玉森
 捧げて

(『諸間切のろくもいのおもい』)

獲物を捧げる相手は、首里の国王ということになってはいるが、この国王は村びとたちにとっては神も同然であった。稲の祭を謡った前記のウムイと、狩猟について謡ったこの「しんまがゑみのウムイ」に共通するのは、まず以下に述べる事柄が神世の昔から行なわれたということとをあげ、次にその事柄の経過を述べ、最後に神に祈願するあるいは神を祭するという形式をとっていることである。そこでこの形式を、いまかりに「昔あたるやに形式」と呼ぶことにする。この形式をとる古謡には、稲作や狩猟を謡ったものもないではないが、祭や祈願について謡ったものが多い。また「アマミキョが始め形式」がミセセル、ティルク口、キューナ、ウムイなど多種類の古謡に見られるのに対して、この「昔からあたるやに形式」は、わたしの知る限り、キューナとウムイにのみ見られるものである。しかし、島びとたちからすれば、信仰の篤さに多少の違いはあっても、自分たちの行なう農耕や狩猟あるいは祈願、祭などが神の世に起源をもっており、祖神の作法通りに事を行なえば共同体の繁栄は約束されるという信仰に関しては、どの形式の古謡を唱えようとも、あるいは謡おうともひとつのものであったとみてよいだろう。

わたしは「アマミキョが始め形式」を稲作に限って定義しておいたのだが、稲作に限らず、何らかの生業について謡ったもの、とするならば、ほかにも例はみつかる。すなわち、まず以下に述べることは、アマミキョが始めたということとを前置きし、次に事柄の経過（作法）を述べ、最後に神に捧げものをするという形のものである。この形式を改めて「アマミキョが始め形式」と定義しなおすことにする。次にあげるのは漁業を謡った恩納村の「海オモイ」である。「霜月ウンデーウユミに謡う漁りの歌曲」という前書がついている。

ウーあまんちゅぬ　へイ	ウーアマミ人のへイ
（「ウー」と「へイ」は以下 各行につくが省略）	
しねんちゅぬ	シネリ人の
むどうくふに	輝く船
むちうるし	持ち降ろし
あみさでいん	網又手も
むちうるし	持ち降ろし
いしとうじゃん	石鰯も
むちうるし	持ち降ろし
いしとうじゃん	石鰯も
むちうるし	持ち降ろし
やをうぬたなかん	やをうぬ間も
かにましより	囲み囲みて
ぎしふぬたなかん	ぎしふぬ間も
うちましより	囲み囲みて
まくぶいゆぬ	マクボ魚の
あかちたらち	赤血垂らし
たまんいゆぬ	タマン魚が
ふく血滴らち	ふく血垂らし

たまがにたが	玉がに達が
たまうるみ	玉うるみ
いしよがにたが	勝れがに達が
いしうるみ	勝れうるみ
みふいらうちへ	三平等掟
ゆふいらうちへ	四平等掟
うふぐるめ一たが	大男前達が
まぐるめ一たが	真男前達が
ぬくらば	残らば
あまらば	余らば
うしやぎわしより	捧げ給え
ねいしわしより	捧げ給え ⁽³⁰⁾

(『琉球王朝古謡秘曲の研究』)

同じく恩納村に伝わる「しらちなのおモイ」も同様の内容と形式をもっており、鍛冶について謡った国頭間切与那の「砂下(船下し)の時のオモイ」⁽³¹⁾もまた「アマミキョが始め形式」である。

「物種子由来形式」⁽³²⁾、「アマミキョが始め形式」⁽³²⁾、「昔からあたるやに形式」の古謡を概観すると、稲作、狩猟、漁業、鍛冶、祈願、祭について謡ったものが見られ、ほとんど生活全般にまたがっていることがわかる。このことからして、少なくとも古謡の内容に即してという限り、島びとたちは生活様式のモデルを神話的始祖のそれに求め、そうすることで、生活の安寧と共同体の繁栄を得ることができる、と信じていたとみることができ。ただし、確定的な結論を出すためには、神話や儀礼との比較検討が必要であり、また文学史的考察も加えなければならない。

それに、生業や労働、祭などの過程について謡った古謡は他にもある。農耕だけをみても、奄美大島の「かみはれのおもり」⁽³³⁾、伊平屋、伊是名両島に伝わったいくつかのティルクロ、座間味島阿佐の「たきねーいのウムイ」⁽³⁴⁾、宮古多良間島に伝わる「上城金殿がニル」⁽³⁵⁾、八重山に伝わるいくつかの「稲が種子アヨウ」や石垣島川平部落の「マヤの神の神口」⁽³⁶⁾などがある。芭蕉布の製作過程を謡う奄美大島の「芭蕉ながれ」⁽³⁷⁾や「芭蕉ながね」⁽³⁸⁾、沖縄の「うりづみごゑにや」⁽³⁹⁾などもある。祭を謡ったものには、たとえば国頭間切安波の「海神祭のおモイ」⁽⁴⁰⁾がある。これらの古謡は、前記3型式の時代的、地域的、社会的相違による変種と考えられるが、この点に関しては別の機会に考察してみたい。ここでは、島びとたちが、自らの生活を神話的始祖との関係においてどのようにみていたのかを、古謡の内容に即して考えてみた。

註

- (1) 『南島古謡』245～6頁。
- (2) 琉球史料研究会『琉球民話集』88頁、1960年、那覇。佐喜真興英『南島説話』38頁、1922年、東京。「海神祭のおモイ(大宜味村塩屋)」『南島古謡』225～6頁。
- (3) 『聞得大君御殿並御城御規式之御次第』1875年(同治14年乙亥)、琉大図書館。
- (4) 『琉球国由来記』巻13「各所祭祀・2」玉城間切の条(伊波普猷他編『琉球史料叢書』第1巻363頁)、『中山世鑑』(同叢書第5巻15頁)。

- (5) 『南島古謡』 225～6頁。
- (6) 同書 8頁。
- (7) 同書 18頁。
- (8) 同書 13～4頁。
- (9) 同書「南島古謡解説」 821～2頁。「沖縄文学の展望」(外間守善編『沖縄文化論叢 4-文学・芸能編』 153～4頁, 1971年, 東京)。
- (10) 『南島古謡』 335～6頁。
- (11) たとえば外間守善「南島古謡解説」同書 818頁。
- (12) 伊波普猷他編『琉球史料叢書』第2巻 565頁。
- (13) 『南島古謡』 296頁。
- (14) 同書 291頁。
- (15) 同書 295～6頁。
- (16) 同書 296～7頁。
- (17) 同書 231～2頁。
- (18) 同書 350頁。
- (19) 外間守善「沖縄文学の展望」(『沖縄文化論叢 4-文学・芸能編』 120～1頁)。
- (20) 『琉球史料叢書』第2巻 354頁。
- (21) 同書 362頁。
- (22) 琉球史料研究会『琉球民話集』 88頁。
- (23) 伊波普猷「南島の稲作行事について」所収(『伊波普猷選集』上巻 443頁)。
- (24) 『南島古謡』 266頁。
- (25) 『仲里旧記』所収(『仲原善忠選集』下巻 184頁)。
- (26) 同書 191頁。
- (27) 「ウムイ(玉城村)」『南島古謡』 253頁。
- (28) 『聞得大君御殿並御城御規式之御次第』
- (29) 「しんまがぁみのオモイ(久志間切久志)」『南島古謡』 243頁。
- (30) 同書 250～1頁。
- (31) 同書 249頁。
- (32) 同書 219頁。
- (33) 同書 6頁。
- (34) 「字伊是名のティルク口」同書 349～50頁。「字仲田のティルク口」同書 350～2頁。
「字諸見のティルク口」同書 352～3頁。「字我喜屋のティルク口」同書 353～4頁。「字田名のティルク口」同書 354～6頁。
- (35) 同書 262～3頁。
- (36) 同書 478～9頁。
- (37) 同書 617～8頁。620～2頁。624～5頁。628～9頁。633～4頁。640～1頁。
- (38) 同書 759～60頁。
- (39) 同書 16～7頁。
- (40) 同書 22～4頁。
- (41) 同書 277～8頁。
- (42) 同書 222頁。

具志川市具志川城跡表採の考古資料について

新 田 重 清

1. はじめに

以下紹介する資料は、当館の地下倉庫を整理している際に確認したものであるが、資料には「中頭具志川城跡裏，1960年1月17日」と採集場所と月日が記載されている。採集場所の「城跡裏」とはグシクの東及南側の海に面した地点であろうとおもわれるが、こゝには地山のマージ層（赤土層）の上に包含層の黒褐色混土貝層がのこっている。層の深い所で80cm位，浅い所では30cm位と推計された。こゝに紹介する資料は、この包含層内から検出されたものとおもわれるが、遺物には一部、波に洗われた痕跡が認められるので、恐らく包含層から海岸に落下し、そこから採集されたものも混在しているものとおもわれる。従って、出土地点や出土状況が明確ではないので一括して表採品としてとり扱っていききたい。しかし、資料の中には 後期から「グシク時代」へと移行していく様相を提示する、興味ある資料も若干含まれているので、これらの資料紹介と今後の本格的な発掘調査をすゝめるうえでの、何らかの参考にならばとおもって、とりあげてみた。

2. 遺跡の立地

先ず、具志川城跡と呼ばれる「グシク」が、沖縄には場所を異にして三カ所ある。一箇所は久米島具志川村仲村渠の具志川城跡，他は沖縄本島南部の糸満市字喜屋武の具志川城跡と本資料が出土した中部の具志川市字具志川の具志川城跡である。三箇所のグシクとも立地的に海岸線の絶壁をなす琉球石灰岩上に築城されていることは共通し、久米島の具志川城跡と南部の具志川城跡とは伝承的に、また深い関係があると語り伝えられている。かつて久米島の具志川城の二代目城主が、本家の伊敷索按司の三男，真仁古樽按司に攻められ、南部の喜屋武に逃れて城を築き、久米島具志川城の故名をとって具志川城跡

と名づけられたともいわれている。

本資料が出土した中部の具志川城跡は具志川市字具志川の東方海岸線標高22m内外の琉球石灰岩上に位置し、グシクの西側には県道37号線が通っている。グシクは海岸線まで延びた台地の先端部に築城されているが、東及び南側は絶壁をなして

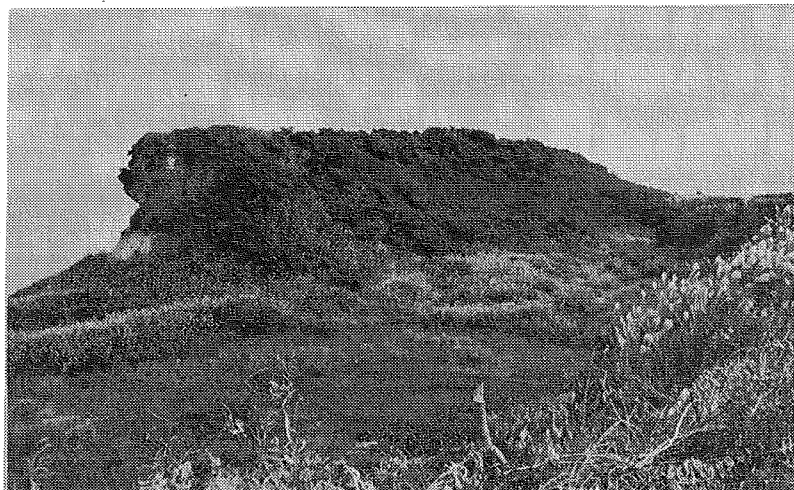
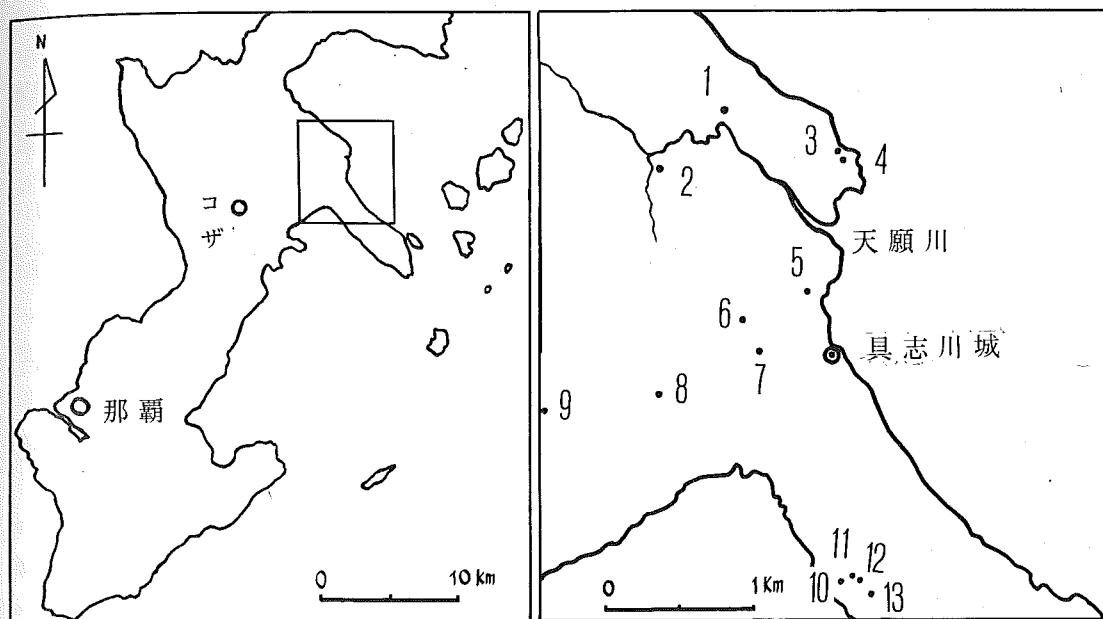


写真1 具志川城

第1図 具志川城付近の遺跡



1 昆布貝塚 2 安慶名城 3 天願貝塚 4 宇堅貝塚 5 アカジャンガー貝塚

6 地荒原貝塚 7 大田貝塚 8 喜屋武マープ遺跡 9 江洲祝部遺跡

10 勝連城南風原遺跡 11 勝連城下貝塚 12 勝連城 13 勝連城東方崖地一帯遺跡

海に接し、北及び西側はU字又はV字状の低湿地帯をなして、恰も軍艦型の台地状地形をなしている。グシクへは南西側の周囲よりはやゝ高まった所から登ることができる。グシクの石垣は殆んど取り壊されて跡形もないが、登り口の坂道から右手に折れた雑木林の中に、長さ1 m30 cm、高さ75 cmの切石面の石垣がのこっている。

城内は平坦をなして一部畑地になっているが、大部分はすすきの生い繁る原野になっている。城内の東北側は生い繁っているすすきに阻まれて一周することは困難であるが、凡そ2,000坪位と推計した。グシク内に拝所を4ヶ所確認した。

グシクは、東側は海に浸食されて断崖状をなしているが、金武湾に浮かぶ平安座島や高離島が足下に見下ろされ、未だ公害に侵されない紺碧の金武湾の背景には、北部の連山が眺望できる絶景の場所である。

本遺跡の周辺には中期に位置づけられる地荒原貝塚や後期のアカジャンガー貝塚及び県指定史跡、安慶名城跡等の遺跡が濃密に分布している。

3. 資料紹介

採集された資料は、土器、須恵、青磁、南蛮片、沖縄製陶器に分類される。

土 器

土器は大別して、勝連城跡南貝塚第Ⅲ層及びフェンサ下層式に対応するものと、更にフェンサ上層式

に位置づけられるものと分類できる。フェンサ下層式に対応する土器は第2図1～11である。文様や器形のうえでは後期貝塚土器の技法を受けついでいるが、殆んど無文で胎土も密で焼き締めもよく、かなり堅緻である。底部は所謂、くびれ平底で、底から胴体部へのカーブが内湾する甕形又は鉢形の土器で、色調は黄褐色や暗褐色を呈するものが多い。

作製は輪積みによる手づくねで指圧痕がみられる。

第2図1は、黄褐色を呈する小形の甕形土器で、凸帯に、先端の平滑な竹筧状施文具による刺突が施されている。同図2も凸帯に粗い刻みが見られる土器で、同図1と手法を同じくするものであろう。多和田真淳氏採集の面縄第一貝塚出土・土器の技法を受けついでたものであろう。^{註6}

同図3は口唇部がやや肥厚し、外面が暗褐色を呈する土器で、後期砂丘遺跡に見られる波状文又は山形文の手法とみられる微弱な条痕がみられる。同図7は、外面が淡褐色を呈する鉢形土器で口唇部には擦痕がみられる。

同図4は茶褐色を呈する土器で、竹筧による飛ばし鉋状の施文が施されている。

同図8は口縁部が直口状を呈する無文土器で、外面が黄褐色を呈し、後期砂丘遺跡に特有なざら々した粗面をのこしている。

同図9は黄褐色を呈する焼成良好な土器で多和田真淳氏が従来具志頭城式と設定した底部の口縁部片であるが、フェンサ城貝塚に於いて下層に顕著であることが明らかにされた。

フェンサ上層式と把握された資料は第2図12～19である。^{註7}フェンサ城貝塚調査概報によると、このフェンサ上層式の出土する層からは、青磁や南蛮の出土が報告されている。後述する具志川城跡表採の青磁や南蛮、沖縄製陶器もフェンサ上層式と把握される土器にともなって出土するものであろうと考えられる。

ところで具志川城跡表採のフェンサ上層式土器と把握された資料は、殆んどが、口縁の内湾する鉢形土器で、底部が安定した平底か、丸底に近い器形を呈するのが一般的である。文様は無文化し、焼きしめもよく、叩けば金属音を発する。色調は外面暗褐色、内面は黄褐色を呈する。胎土に石粒や砂粒が混入し、手づくねによる製作で器壁が一定しない粗面が見られる。整形としては筧か植物体を束ねて調整した跡の擦痕が見られる。

同図12は、口縁部がくの字形を呈する無文の甕形土器で、外面は暗褐色、内面は黄褐色を呈する。胎土に石粒や白い細かな物質が混入して、外面には白い斑点がみられる。器壁はほぼ一定し0.5cmである。この種の土器はフェンサ城貝塚出土にもみられるが、器形のうえで土師器の影響を受けて登場するので

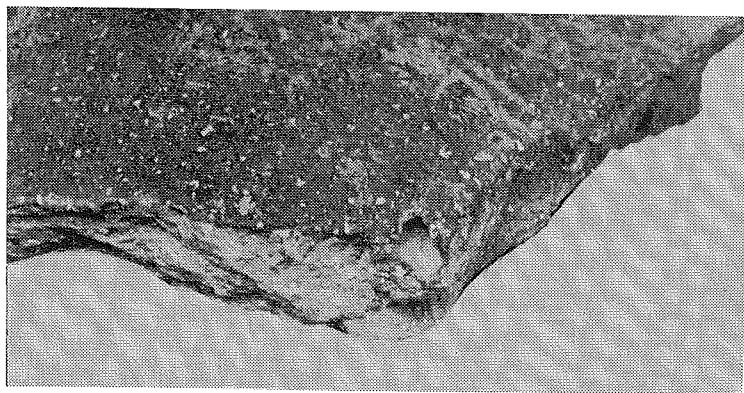


写真2

はなかろうかとおもわせるものである。

同図13は、口縁部が内湾する浅鉢で外面は暗褐色、内面は黄褐色を呈する、フェンサ上層式と設定される形式土器の最も典型的なものである。この土器で注意したいのは胴部の胎土中に粃又は玄米の圧痕かとおもわれる箇所がみられる(写

真2)。その数値は、長さ5.7mm、巾35mm、比1.63と計測される。

同図14は外耳土器で胎土に白い石粒の物質が多量に混入し、その色調も外面灰褐色、内面灰白色を呈する。この種の土器が表採品中あと一例みられる。外耳は縦耳形で、その数値は縦19mm、横15mm、高9mmと計測される。

フェンサ上層式と把握される底部の底径は、下層式よりも幅広く、しかも安定した平底を有するのが一般的である。底部から胴部にかけて外面が煤かった色調を帯びている土器が表採品中数例見られるが、恐らくは煮沸用としての機能を果したものであらうと考えられる。

第2図19は、外面に赤褐色を呈する焼成良好な底部で、篋によって器面を整形した後、植物体を束ねたもので仕上げたらしくその擦過痕が器面内外にみられる。底の裏側には布目痕がみられる(写真3)。底が完形品でないため、布目のみられる部分は小範囲ではあるが、判然とし、平織りである^{註8}のご教示をうけた。布目は割と細かいが、繊維原体は芭蕉かマーウー(苧麻)、恐らくは芭蕉だらうと推定される。これまで布目痕のある土器の出土例は、フェンサ城貝塚で報告されているが、この標品によって資料を追加することができた意義は大きいとおもわれる。

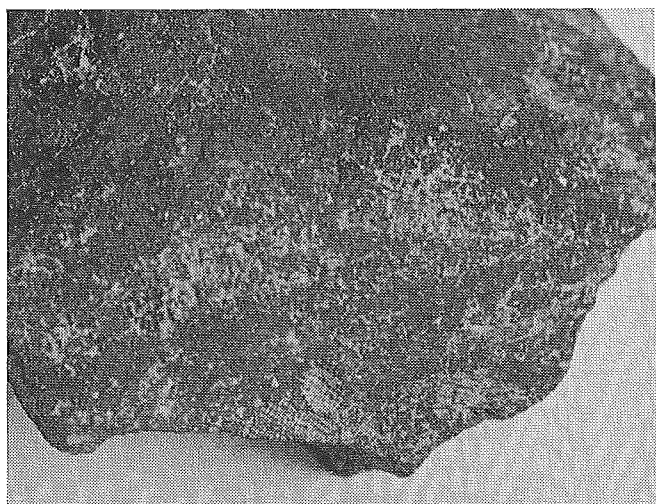


写真3 布痕土器

須恵器

須恵器は4箇表採されているが、いずれも沖縄のグシクから出土するものである。

第2図20は底径240mmの底部で、色調は灰青色を呈し、外面は器面調整がよく施されて滑らかである。内面には回転擦痕がみられる。底の裏側に、木の実の圧痕がみられる。長径80mm、巾径55mmと計測される。後日、靱圧痕かとおもわれる資料と共に専門家に検討をお願いするつもりでいる。同図21は波状文を有する胴部で、器壁の厚さは32~40mmで薄手の須恵である。色調は灰青色を呈し、内面に回転擦痕が見られる。又、表採された底に同心円状のロクロ痕を有する輪糸切も見られる。

青磁

青磁は20箇表採されているが、その代表的なものは、第2図22~25及び第3図1~8である。同一資料を、実測したものが第2図であり、写真にしたものが第3図であることを、あらかじめことわっておきたい。復元される資料からは碗形を呈し、青白磁が一片で、他は青磁である。製作年代は元末~明初^{註10}の14世紀頃だらうと鑑定された。

第2図22(第3図1-2、表-裏)は碗形を呈する青白磁で、外面には線彫が施され、口唇の内外には、くちはげが見られる。

同図23(第3図6)は、青磁のやゝ大きな碗で、内外器面に釉薬のひびがみられる。

同図24(第3図7-8、高台-見込)は、見込みに螺旋状の沈線が見られ、高台は揚げ底で釉薬はかっつてない。同図25(第3図4-5、高台-見込)は、碗形を呈する無文の青磁で、胎土に黒い斑点が

見られる宋胡録系青磁かとおもわれるものである。第3図3は皿形を呈する青磁で、見込みには花模様が見られる。

南 蛮

表採された資料に南蛮片が4個ある。1個は口縁部で、他は胴体部であろうとおもわれる。4片とも釉薬が掛けられ、飴色又は茶黒色を呈している。

沖縄製陶器

第3図9-10(高台-見込)及び11は、従来、安南系磁器かと考えられていたが、たまたま博物館に所蔵されている湧田窯出土に全く類例品があることを確認した。従ってこの表採された資料も湧田窯で焼成されたものであろうと推定するにいたった。^{註11}

第3図9-10は、器形は舶来青磁と類似しているが、胎土や釉薬は沖縄的である。釉薬にはこげ茶色が掛けられている。第3図11も同様である。

4. 結 び

以上、具志川城から表採された資料について、略述してきたが、フェンサ下層式から上層式に対応する遺物が包含されていることが確認された。尚、このことは本格的な発掘調査によって一層明確にされることとおもわれる。フェンサ下層式土器には、須恵器が共存し、上層式には14世紀頃の元末～明初の青磁や沖縄製陶器(那覇市在の古窯、湧田窯系)が共存するであろうと推定されることから、具志川城の存立年代は、かなりの時代的幅があり、14、15世紀頃までは存続していたであろうことが考えられる。

表採された資料は、従来の報告例にみられる範疇ではあるが、グシク時代の様相を究明する手がかりとなる若干の資料を追加することができた。即ち、布目痕土器の確認や靱圧痕及び木の実の圧痕かとおもわれる土器の表採がそれである。又、具志川城の立地や自然遺物、人工遺物を含めた文化内容及び拝所の存在は、今日、学界で問題となっているグシクの起源や範囲及び機能論にかゝわる問題であり、今後、問題を整理し、考究されなければならない大きな課題である。

末尾ながら恐縮ですが、本稿を草するに当り、青山学院大学三上次男教授を始め、多くの方々からご教示をいただき、また図版の作成に安里進氏からご助力を得たことを付記して、衷心からお礼申し上げます。

註1、地荒原貝塚発掘報告「1962年版文化財要覧」所収。

註2、アカジャンガー貝塚調査概報「1960年版文化財要覧」所収。

註3、勝連城跡第2次発掘調査報告書「1966年版琉球政府文化財調査報告書」所収。

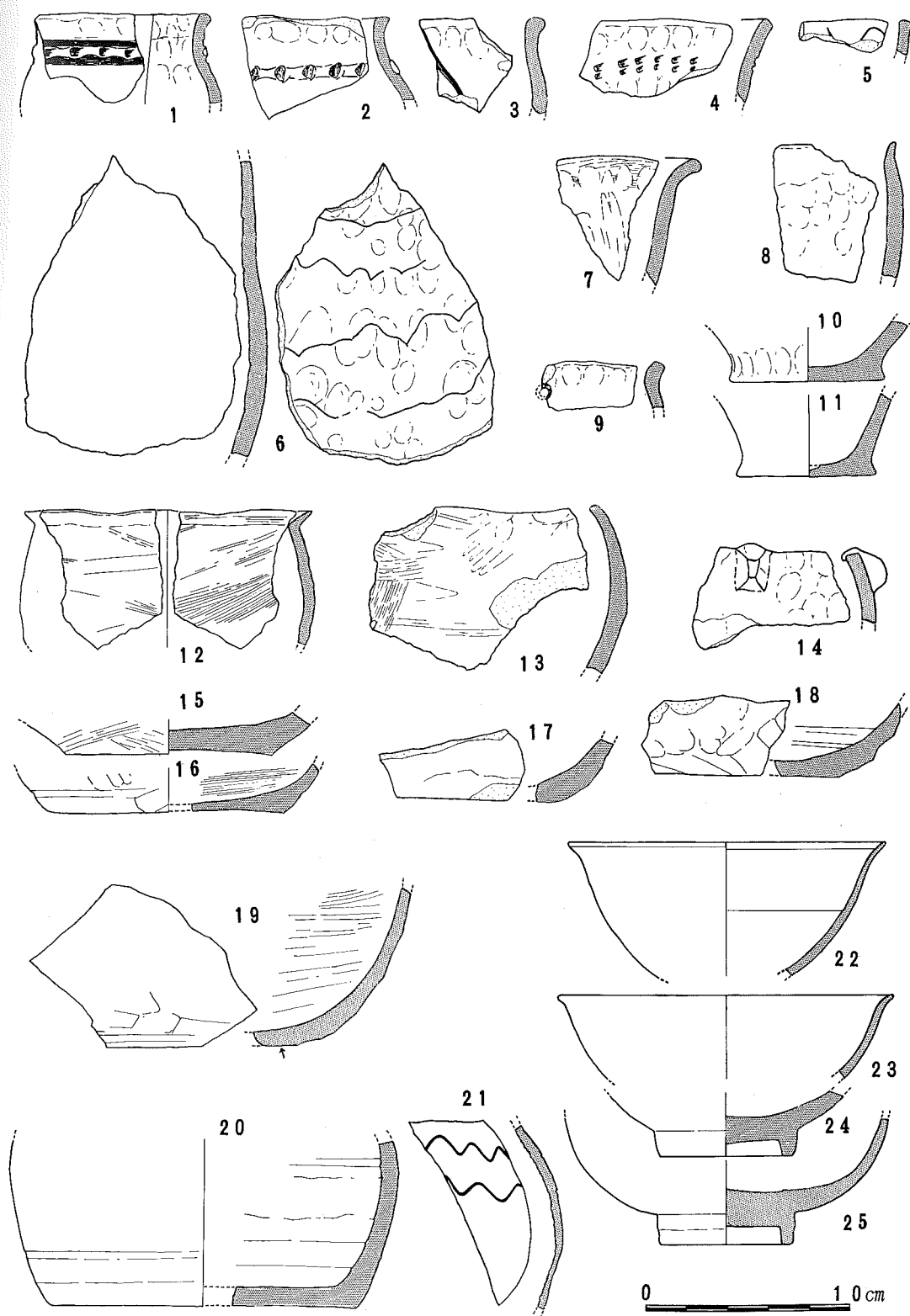
註4、5、7、9、フェンサ城貝塚調査概報「1969年琉球大学法文学部紀要」所収。

註6、琉球列島の貝塚分布と編年の概念「1956年版文化財要覧」所収。

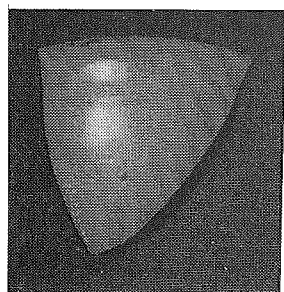
註8、染織研究家大城志津子氏、当館の学芸員渡名喜明氏のご教示によるもの。

註10、青山学院大学三上次男教授が、沖縄の陶磁器調査のため来館された折、ご教示によるもの。

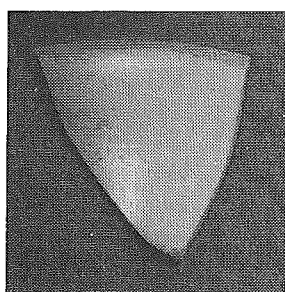
註11、当館の学芸員宮城篤正氏のご教示によるもの。



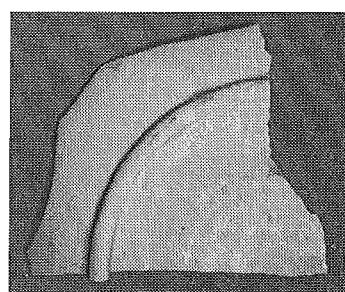
第2図 土器・須恵・磁器・実測図



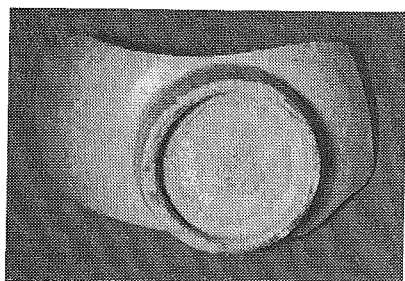
1



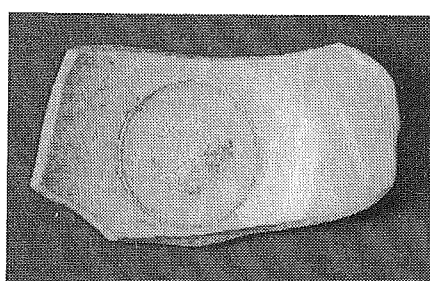
2



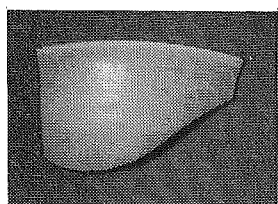
3



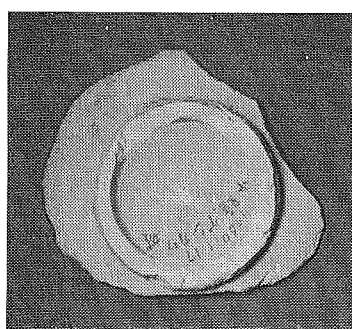
4



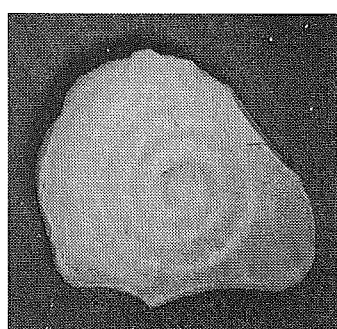
5



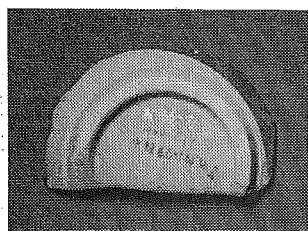
6



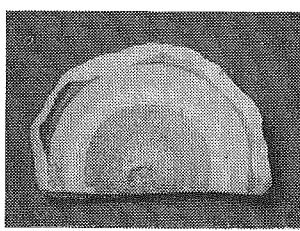
7



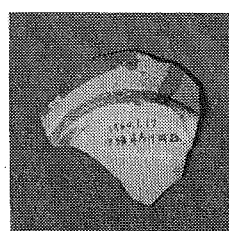
8



9

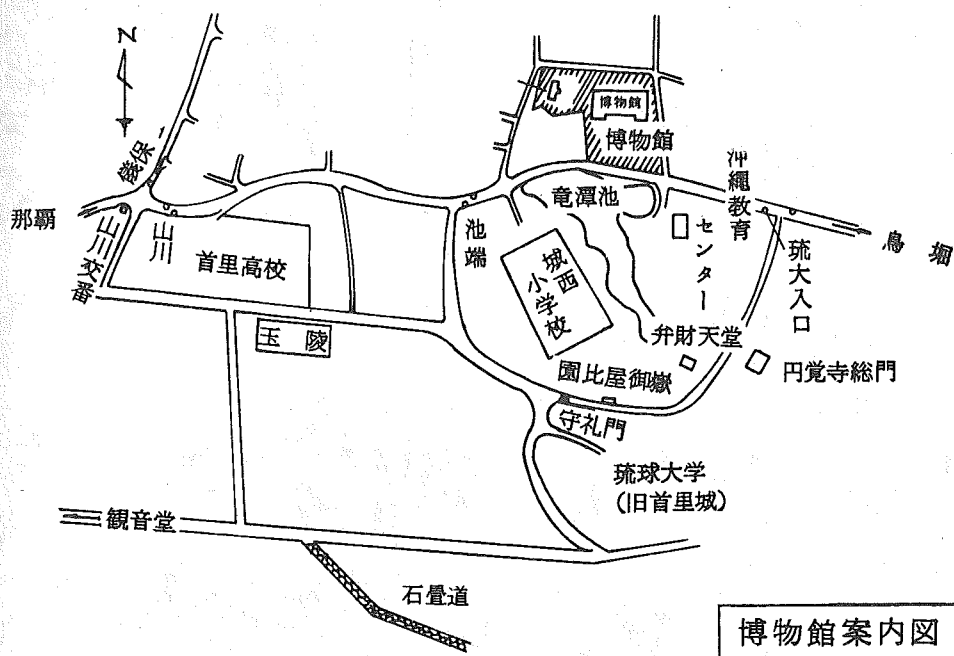


10



11

第3図 磁器・陶器



案内

名称 沖縄県立博物館

所在地 沖縄県那覇市首里大中町1丁目1番地 電話 0988 32-2243 〒903

開館日

日・火・水・木・金・土

午前9時～午後4時30分(但し、入館券の発売は午後4時まで。)

休館日

毎月曜日、公休日、その他陳列替等による臨時休館日

年末年始 12月28日～1月4日

入館料

大人 50円

学生 20円

児童生徒(高校及び小中学生) 10円

※ なお20名以上の団体見学は2割引

◎ バス……………首里バス「開南線」池端又は琉大入口停留所下車、徒歩で2分

沖縄県立博物館

沖縄県立博物館

那覇市首里大中町1の1

沖縄県立博物館々報 No. 7

昭和49年3月15日発行

印刷 株式会社 文進印刷所

那覇市上間567

電話 33-2531・1923